

松江市文化財調査報告書 第65集



文化財保護  
シンボルマーク

# 黒田畦遺跡発掘調査報告書

1995年3月

松江市教育委員会  
財団法人松江市教育文化振興事業団

## 例 言

1. 本書は平成6年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した神魂団地造成事業にか  
かる黒田畦遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本発掘調査は井川土地企画有限会社から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文  
化振興事業団が実施したものである。

3. 調査の組織は下記のとおりである。

依頼者	井川土地企画有限会社	代表取締役	井川 進
主体者	松江市教育委員会		
事務局	教 育 長	諏訪	秀富
	生涯学習部長	中西	宏次
	文化課長	中林	俊
	文化財係長	岡崎	雄二郎
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課		
	理 事 長	人塚	雄史
	事 務 局 長	佐藤	千代光
	調 査 係 長	中尾	秀信
調査者	調査担当者	瀬古	諒子
	調 査 員	遠藤	正樹
	調 査 補 助 員	稲田	奨

4. 調査の実施に当たっては、次の方々の指導と協力を受けた。記して感摺の意を表する次第であ  
る。

川原和人（島根県教育庁文化課埋蔵文化財係主幹）、広江耕史（同文化課主事）、今岡一三（同  
文化課主事）、池田満雄（島根県文化財保護審議委員考古担当）、平川南（国立歴史民俗博物館歴  
史研究部教授）、櫻木晋一（九州帝京短期大学助教授）、村上 勇（広島県立美術館主任学芸員）、  
山本信夫（太宰府市教育委員会教育部文化課文化財保護係技術主査）、西尾克己（島根県教育庁文  
化課調査第三係長）、平石 充（同主事）（敬称略）

5. 出土遺物は松江市教育委員会文化課で保管している。

6. 遺物の実測及び浄書は瀬古、稲田、萩野哲二が行い、写真撮影、執筆・編集は瀬古が行った。

# 目 次

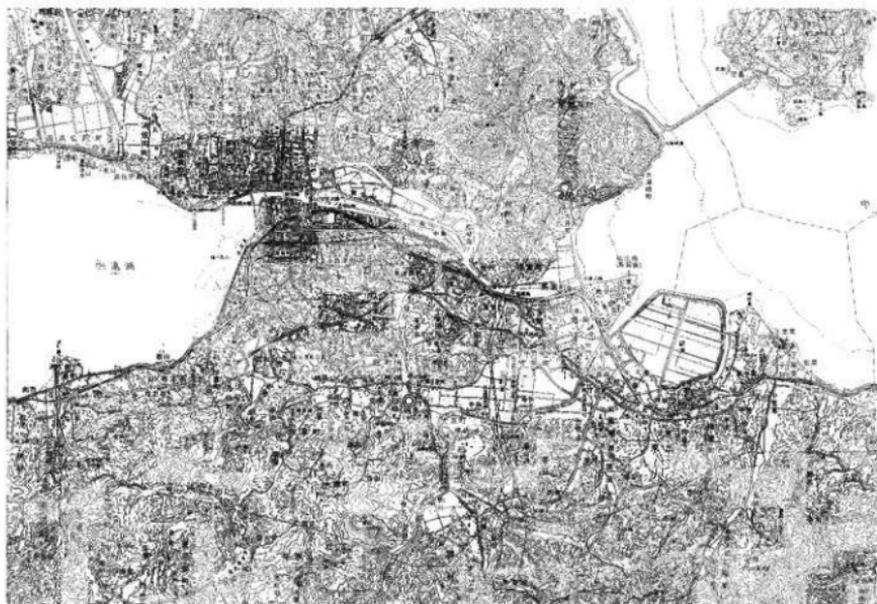
I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の位置と歴史的環境	2
III. 調査の概要	
1. 東調査区	
(1) 土壇 (SK-01~18)	4
(2) 土壇中の出土遺物	15
(3) 土壇墓 (SX-01~06)	35
(4) 土壇墓の出土遺物	36
(5) ビット群	39
2. 西調査区	
(1) 掘立柱建物と柵列	39
(2) ビット中およびビット検出面の出土遺物	42
(3) 土壇	42
(4) 土壇中の出土遺物	44
(5) 溝状遺構	45
(6) 溝状遺構中の出土遺物	45
IV. 遺構と遺物について	
1. SK-10について	47
2. 土壇墓について	48
3. 建物跡について	49
V. まとめにかえて	51

## Ⅰ. 調査に至る経緯

井川土地企画有限会社では、市内大庭町黒田地内において平成4年度に「神魂団地造成工事」を計画し、平成4年7月2日付でその予定地内の埋蔵文化財の分布調査依頼書が松江市教育委員会教育長宛に提出された。

しかし、この予定地東側に「黒田畦遺跡」という周知の遺跡が所在していることから、井川土地企画有限会社と協議した結果、平成4年9月21日から30日の間に予定地内の試掘調査を実施することとなった。そして、計4日間を費やして試掘調査を実施した結果、柱穴と思われる多数のピットや落ち込み状遺構などが検出されると共に奈良時代を中心とする須恵器が多量に出土したことから、この予定地内には、奈良時代の掘立柱建物跡の存在が考えられ、この遺跡は周知の遺跡である黒田畦遺跡の一部であると想定された。そして、平成4年11月12日付、教文第548号でこの遺跡の取り扱いの協議を鳥根県教育委員会とおこない、平成4年12月15日付教文第617号で井川土地企画有限会社に試掘調査の結果を回答すると共に「①平成5年度以降に予定地内全域についての本格的な発掘調査（全面調査）が必要なこと。②この試掘調査で確認された遺跡を黒田畦遺跡と命名すること。」を通知した。

その後、発掘調査計画を調整した結果、平成6年度において調査を実施することになったものである。



第1図 黒田畦遺跡位置図 (1:100,000)

## Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境

黒田駐遺跡(1)は島根県松江市南郊の大庭町字黒田244-1に所在する。このあたりは『出雲国風土記』に「神奈備野」と称される茶臼山(171.5m)の南西麓から続く標高20数mの台地になっている。東方には意宇川の沖積作用によって形成された意宇川下流平野が広がり、出雲地方有数の穀倉地帯となっており、原始、古代から人々の活発な活動の場となって来た。

旧石器時代の遺物では黒田遺跡(2)から玉髄製の剥片や石核が出し、四王寺跡(3)西方の市場遺跡(4)では黒曜石製の細石片石核になる可能性のあるものが発見されている。

縄文時代の遺跡は意宇平野の北辺部に点々と所在し、また茶臼山の西北を大橋川にそそぐ馬橋川中流域に石台遺跡(5)があり縄文後・晩期の上器が多く出土している。

弥生時代の遺跡は意宇平野の中央部に布田遺跡(6)、夫敷遺跡、上小紋遺跡(7)、向小紋遺跡(8)などの遺跡が存在し、溝状遺構や水田跡が調査されている。

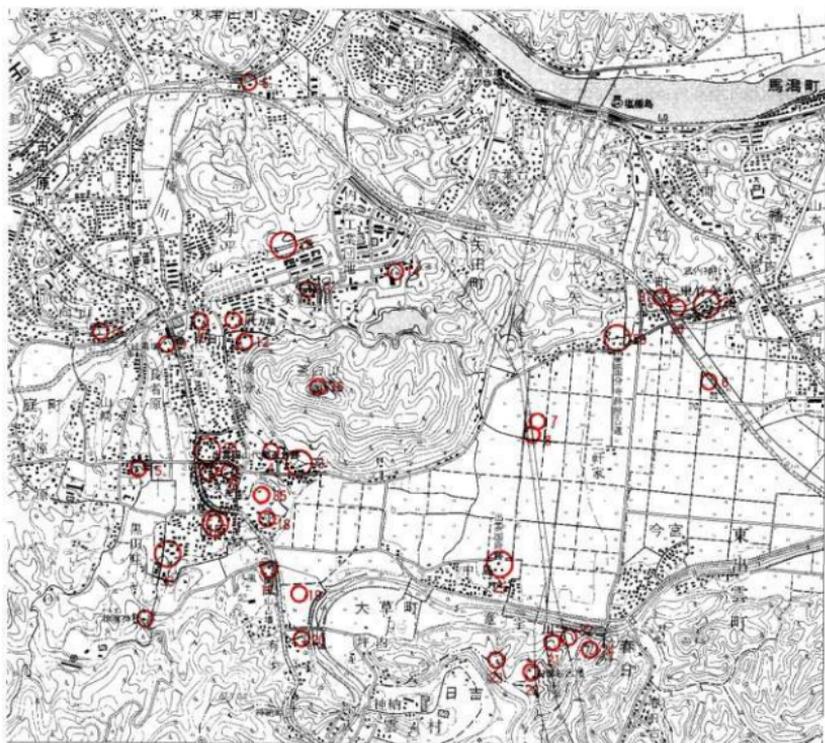
古墳時代中・後期には県内有数の古墳群が造られる。茶臼山西北の馬橋川水系には大庭鶏塚古墳(9)、山代二子塚古墳(10)、山代方墳(11)、永久宅後古墳(12)、狐谷横穴群(13)、王免横穴群(14)、東瀬守古墳(15)があり、西岸の向川には未盗掘の可能性のある石棺式石室をもつ向山1号墳(16)も発見された。南方の丘陵には「額田部臣」の銘文入冨頭大刀が出土した岡田山1号墳(17)をはじめとして岡田山2号墳、団原古墳(18)、岩屋後古墳(19)、御崎山古墳(20)などが分布している。意宇平野の南側丘陵上には古天神古墳(21)、東百塚(22)、西百塚古墳(23)、安部谷横穴群(24)などが営まれている。

歴史時代に入ると意宇平野とその縁辺には出雲国庁(25)、意宇郡家、意宇軍団、駅、山代郷正倉(26)などが設置され、新造院も2ヶ所あったことが『出雲国風土記』にみえる。平野北縁には国分寺(28)、国分尼寺(29)も造立されて、この一帯は古代出雲の政治と文化の中心地として栄えたことがうかがわれる。

中世の遺跡は意宇平野の北縁部に中竹矢遺跡(31)、南縁部に大原敷・才垣台遺跡、大崎谷遺跡(32)、西の低丘陵上には山雲国造館跡(33)があり、12~14世紀代の貿易陶磁器や十師質土器が発見されている。茶臼山の内南麓を中心とした地域では14~16世紀頃の遺跡が主に存在し、黒田館跡(34)、小無田遺跡(35)、古代寺院として知られているが中世の遺物も出土している四王寺跡(3)、15・6世紀代の遺物と同時期の可能性のある建物跡が見つかった市場遺跡(4)などが分布している。茶臼山(36)は在地有力者の中世山城として少なくとも15・16世紀代には機能・存続していたらしい。

### 参考文献

島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』昭和50年



1. 黒田畦遺跡 2. 下黒田畦遺跡 3. 四王寺跡 4. 市場遺跡 5. 石台遺跡
6. 布田遺跡 7. 上向校遺跡 8. 向小校遺跡 9. 大庭鶴塚遺跡 10. 山代二子塚
11. 山代方墳 12. 永久宅後古墳 13. 狐谷横穴群 14. 十王免横穴群 15. 東源寺古墳
16. 向山1号墳 17. 栗田山古墳群 18. 圓原古墳 19. 治屋後古墳 20. 御崎山古墳
21. 古天神古墳 22. 東百塚古墳群 23. 西百塚古墳群 24. 安部谷横穴群 25. 出雲国庁跡
26. 山代郡正倉跡 27. 東美奈寺 28. 國分寺跡 29. 國分尼寺跡 30. 國分寺瓦葺跡
31. 中竹矢遺跡 32. 天満谷遺跡 33. 出雲国道館跡 34. 黒田館跡 35. 小無田遺跡
36. 米白山

第2図 周辺の主要遺跡 (1:25,000)

### Ⅲ. 調査の概要

調査地は標高約24mの東西に細長い畑地である。表土から地山までは深さ0.3～1.0mを測るが、中央部が最も高く、東に行くに従って深くなり、西に向かってやや傾斜している。東端部では長芋などが植えられていたため深く攪乱され、地山面まで畝状に加工されていた。遺構はすべて地山面で検出され、遺構検出面より上層の遺物は細片化していた。

調査にあたって、排土置き場の確保が困難であったため調査区を半分に分け、東調査区、西調査区として順次調査を行った。

東調査区では奈良時代の土壇11基、中世の土壇墓6基、時期不明の土壇7基、柱穴状のピット60余穴が発見され、多くの遺物が出土した。

西調査区では掘立柱建物2棟、標列3、柱穴状のピット約350穴、土壇7基、溝状遺構2条が発見された。遺物は遺構中及び周辺から奈良時代～戦国末期頃の須恵器、土師器、土師質土器、陶磁器が出土している。

#### Ⅰ. 東調査区 (第3図)

##### (1) 土壇 (SK-01～18)

##### ① SK-01 (第5図)

形態：平面形は隅丸長方形

法 量：長辺2.2m、短辺1.5m、深さ15～50cm

出土遺物：須恵器（輪状つまみ付の蓋、高台付環、壺他）、土師器（赤彩の環、土製支脚片）（第13図）

出土状況：遺構上面または堆積土上層で出土。

用 途：塵埃廃棄場

時 期：国庁第3～4形式<sup>(群1)</sup>

##### ② SK-02 (第7図)

形態：隅丸長方形、断面ゆるやかなU字状。

法 量：長辺4.0m、短辺2.7m、深さ90cm

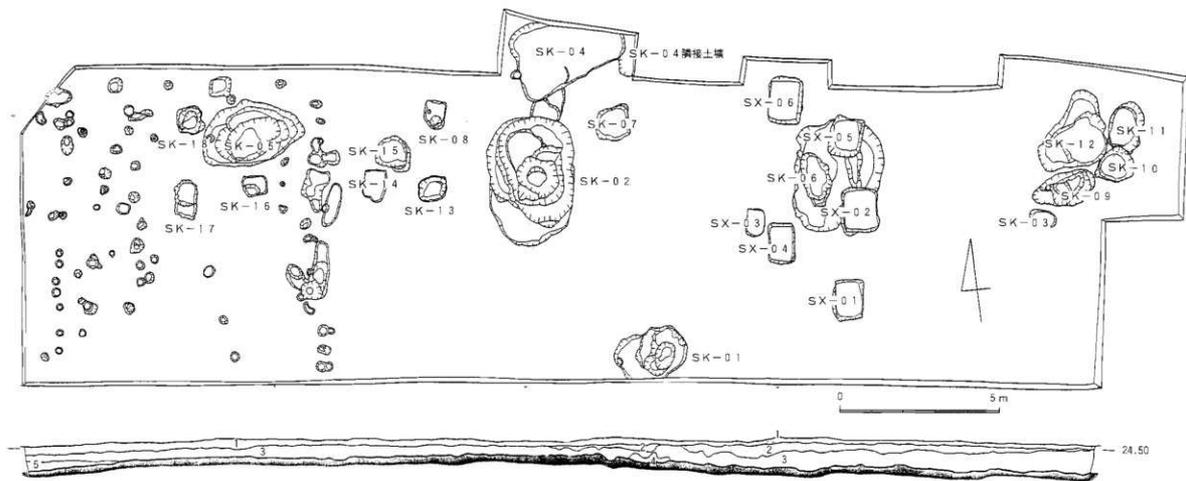
出土遺物：須恵器（宝珠状つまみ付蓋、環、高環、皿、壺等）、土師器（蓋、環、甕、土製支脚、製塩土器）（第14～20図）

出土状況：内部の堆積土はだまかに3層に分かれるが、遺物は上層に多く、中層はほとんど見られず下層は上層に比べて少ない。下層の遺物とSK-06の遺物が接合した。

用 途：土器廃棄場

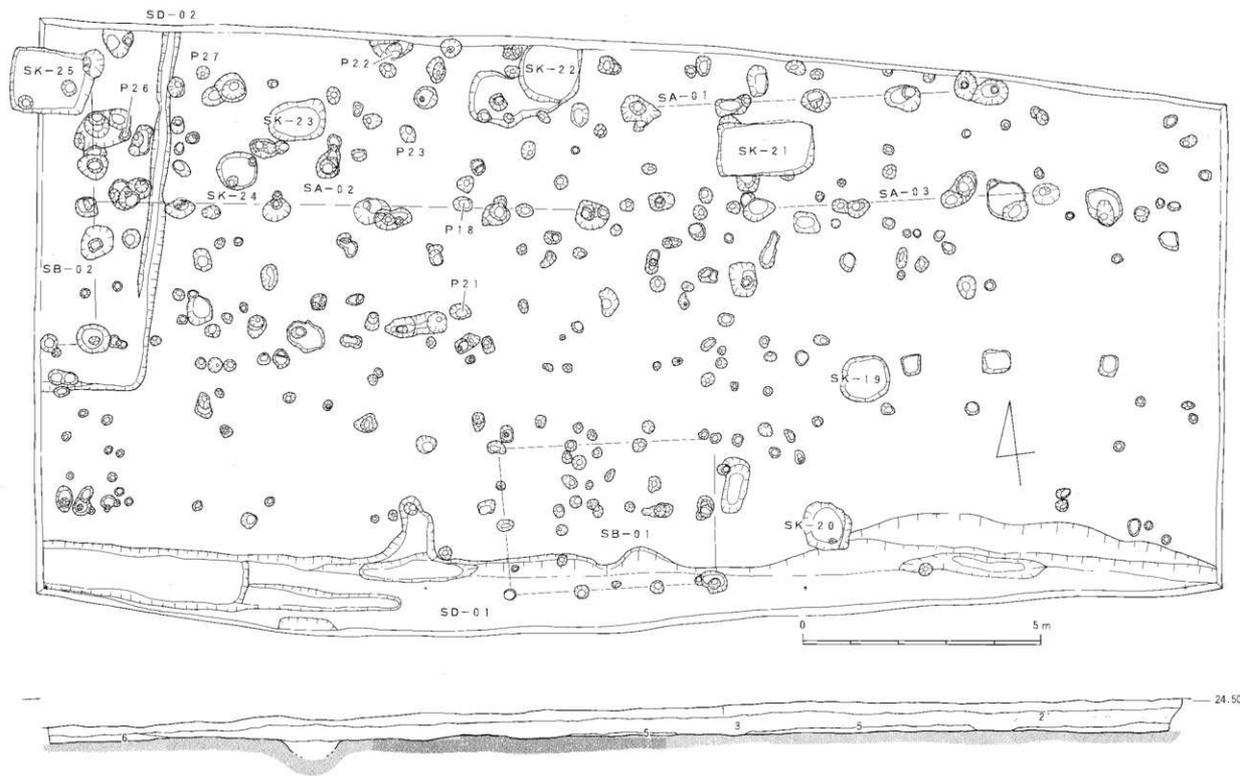
時 期：国庁第4～5形式

##### ③ SK-03 (第11図)



1. 暗褐色土（耕作土）
2. 暗褐色土に黄褐色小ブロックを少量含む。
3. 暗褐色土に黄褐色小～中ブロックを多量含む。
4. 黒褐色土と3の混合土
5. 暗茶褐色～黒褐色土に黄褐色中ブロックを多量に含む。

第3図 東調査区 調査後全体図



1. 暗褐色土 (耕作土)
2. 暗褐色土に黄褐色小ブロックを少量含む
3. 暗褐色土に黄褐色小～中ブロックを多量に含む (2よりやや硬)
5. 暗茶褐色～黒褐色土に黄褐色中ブロックを多量に含む
6. 黄褐色土 (軟)
7. 地山・黄褐色土 (硬)

第4図 西調査区 調査後全体図

形態：卵形

法量：長径85cm、短径50cm、  
深さ15cm

出土遺物：須恵器（高台付皿2）  
（写真図版7）

用途：塵埃廃棄坑（土器片も  
混じる）

時期：国庁第3又は第4形式  
④SK-04（第6図）

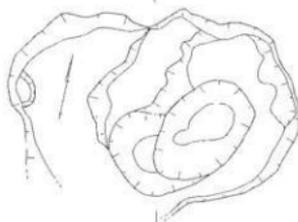
形態：長方形

法量：長辺3.5m、短辺2.3  
m、深さ20~30cm

出土遺物：須恵器（蓋、坏、皿、  
鉢、壺、甕、横瓶等）、  
土師器（甕、赤色塗彩  
の坏・鉢・皿、裂塩土  
器）（第21~24図）

用途：土器廃棄坑

時期：国庁第3~第4形式



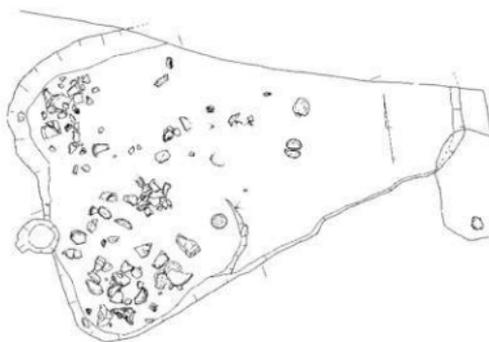
24.50

24.50



0 1m

第5図 SK-01実測図



24.50

—24.50

黒褐色土（黄褐色ブロック少量含む）



0 1m

第6図 SK-04実測図

⑤SK-05 (第8図)

形態：卵形

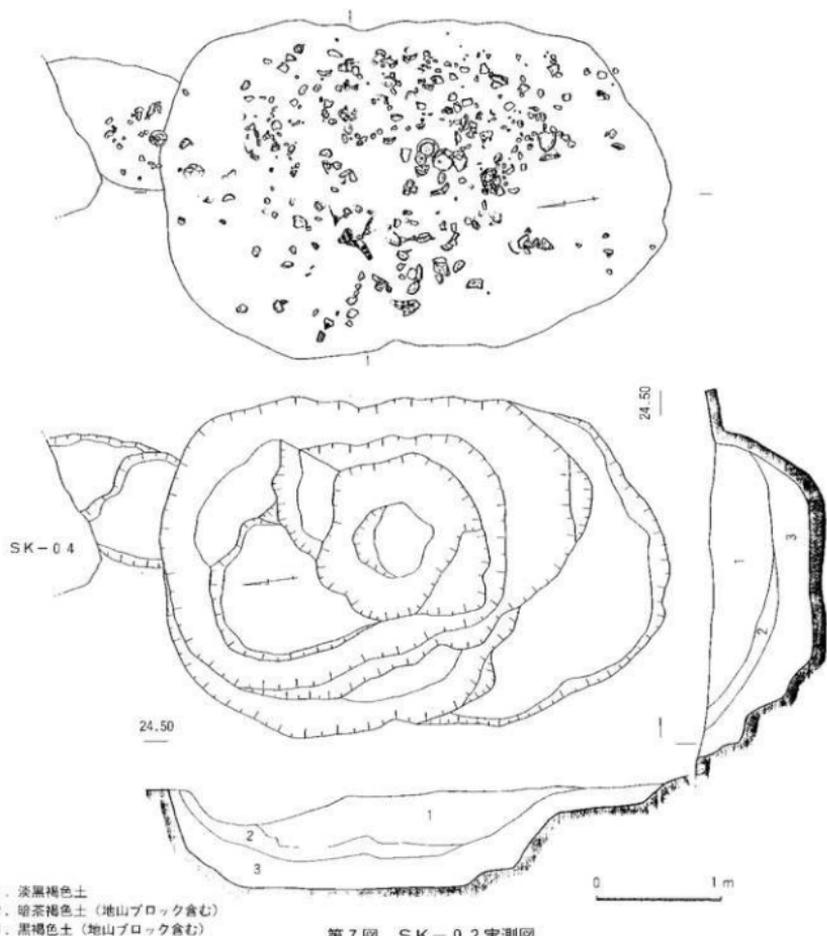
法量：長径3.2m、短径2.0m、深さ1.0m

川土遺物：須恵器（輪状つまみの蓋、高台付坏、甕）、土師器（赤色塗彩の坏）（第25図）

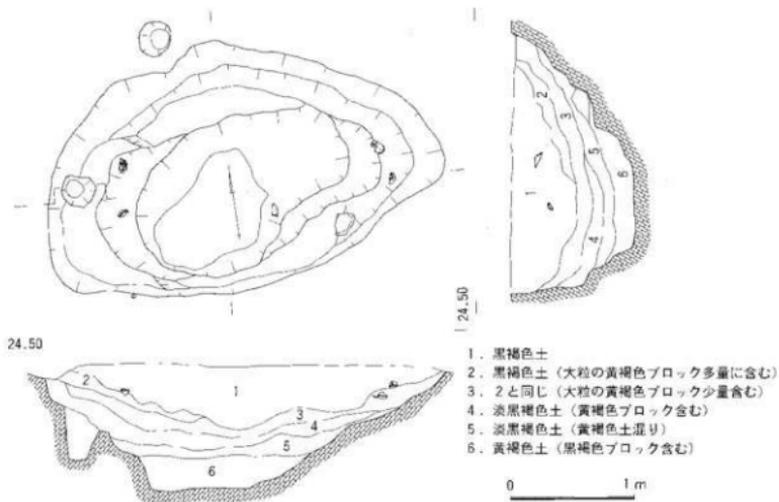
出土状況：内部の堆積土は大まかに6層に分かれるが、遺物は上層でのみ出土している。

用途：塵埃廃棄坑（土器片も混じる）

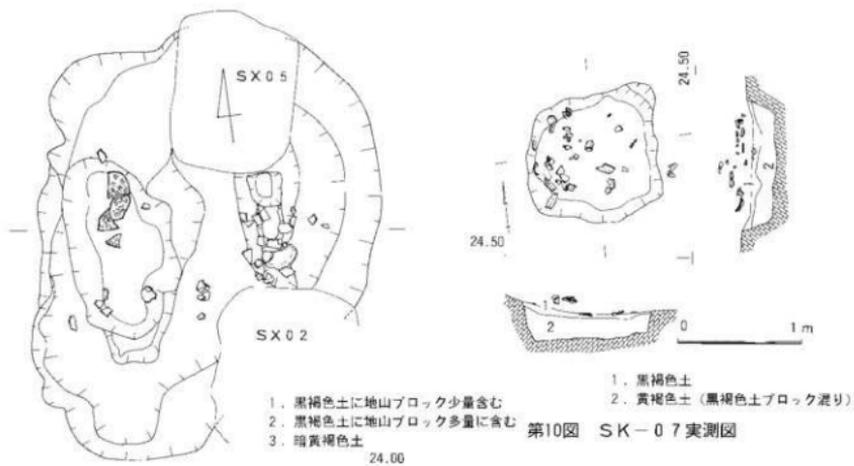
時期：国庁第3～第4形式



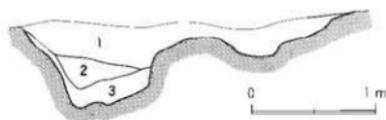
第7図 SK-02実測図



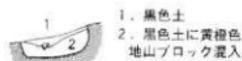
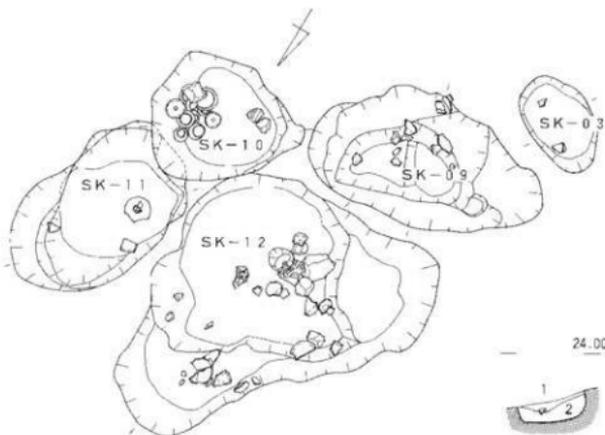
第8図 SK-05実測図



第10図 SK-07実測図



第9図 SK-06実測図



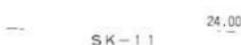
1. 黒色土
2. 黒色土に黄褐色地山ブロック混入



1. 明黒褐色土 (地山ブロック混り)
2. 黒褐色土 (地山ブロック混り)
3. 暗黄褐色粘質土 (少量の黒褐色土混り)



1. 黒色土
2. 黒褐色土 (地山ブロック混り)
3. 黄褐色粘質土 (黒色土混り)



1. 明黒褐色土
- 1'. 1と同色 (小粒の黄褐色地山ブロック混り)
- 1''. 1と同色 (黄褐色地山ブロック含む)
2. 黄褐色土
3. 黒褐色土
- 3'. 3と同色 (黄褐色地山ブロック混り)
4. 黒褐色土と黄褐色土の混合粘質土 (黄褐色土の方が多量) (地山ブロック多量)
- 4'. 4より黒褐色土の方が多量, 地山ブロック少量
5. 黄褐色粘質土



1. 明黒褐色土
2. 黒褐色土
- 2'. 2と同色 (黄褐色粘土を多く含む)
3. 黄褐色粘質土

第11図 SK-03, 09~12実測図

⑥SK-06 (第9図)

形態：後世の土壌基によって切られているが隅丸長方形に近い。底部は凹凸が激しい。

法量：長辺3.3m、短辺2.8m、深さ15~65cm

出土遺物：須恵器 (蓋、杯類、血瓶、高杯、甕)、土師器 (カマド片、甕、上製支脚) (第26図)

用途：土器廃棄坑

時期：国庁第4形式

⑦SK-07 (第10図)

形態：やや不整な方形 (台形に近い)

法量：一辺約1.0m、深さ20cm

出土遺物：須恵器（坏類、蓋、皿、鉢）、土師器（甕、坏類、高坏、製塩土器）（第27図）

出土状況：土壌検出面の上部および内部堆積土の上層で出土した。

用途：塵埃および土器廃棄場

時期：国庁第3～第4形式

⑧SK-09（第11図）

形態：長卵形

法量：長径1.95m、短径1.1m、深さ60～80cm

出土遺物：須恵器（高坏、蓋）、土師器（カマド片、甕片）（第28図）

出土状況：土壌検出面付近でのみ出土した。

用途：塵埃廃棄場（土器片も混じる）

時期：国庁第4形式

⑨SK-10（第11図）

形態：やや不整な円形、底部はほぼ平ら

法量：直径約1.1m、深さ約80cm

出土遺物：須恵器（鉤状偏平つまみ付の蓋大1、小1、高台付坏4、坏1、高台付きの皿4（墨書土器1）、土師器（赤色塗彩の皿1）（第29図）

出土状況：土壌内部の埋土は3層あるが、第2層の上層から第1層中に、12個体の完形土器がすべて伏せられ、土壌の中央に向かってややずり落ちた状態で出土した。土器群の上に1個と、少し離れた同レベルの位置に10cm角の石が乗っていた。

用途：祭祀関係か

時期：平城宮Ⅲ～Ⅴ併行、国庁第4～第5形式

⑩SK-11（第11図）

形態：南側をSK10によって切られているが、ほぼ長円形か。底部は平ら。

法量：長径1.65m、短径1.0m、深さ80cm

出土遺物：須恵器（高台付皿、高坏）（写真図版11）

出土状況：土壌検出面と、土壌上端から少しずり落ちた状態で出土した。

用途：塵埃廃棄場（土器片も混じる）

時期：国庁第4（？）形式

⑪SK-12（第11図）

形態：隅丸の三角形、南東に向かって深くなる。中程にビット状の落ち込みあり。

法量：長辺2.7m、短辺2.0m、深さ15～35cm

出土遺物：須恵器（皿類、高坏、甕、蓋）、土師器（土製支脚）（第30図）

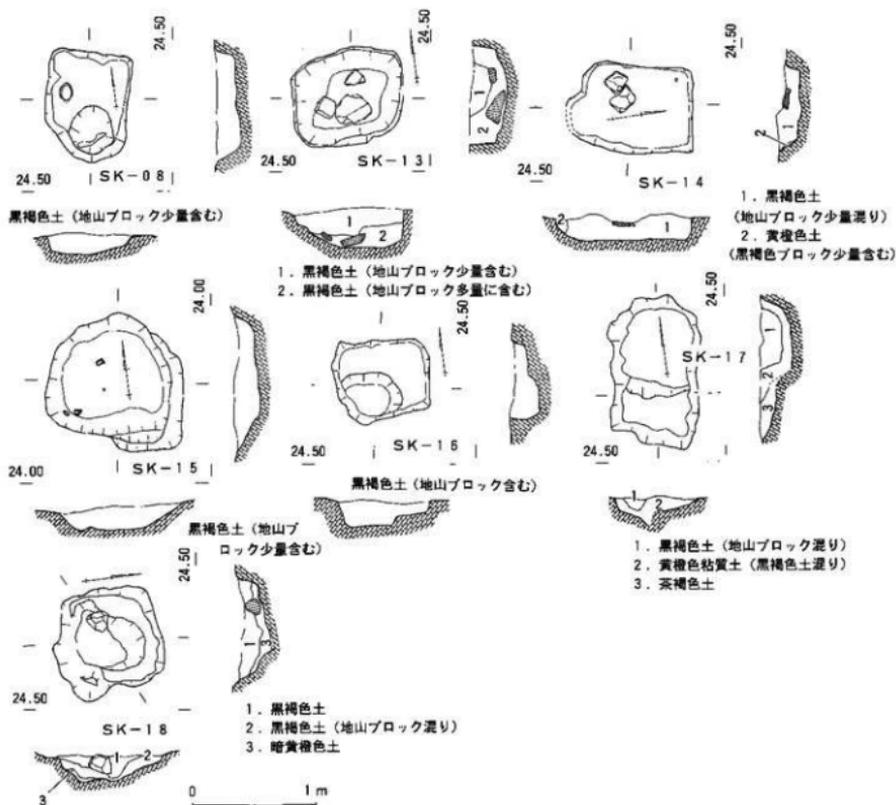
出土状況：坑底から20cm程浮いた箇所散乱。

用途：塵埃及び土器廃棄場

時期：国庁第4形式

⑫SK-08、13～18（第12図）

いびつな方形や長方形に掘り込まれた浅い土壌である。石を置くものはあるが、遺物は伴わない。詳細は表1（P14）の通りである。



第12図 SK-08, 13~18実測図

表1 東調査区・その他の土壌一覽表

土壌番号	形態	法量 (m)	出土遺物	出土状況他
SK-08	長方形に近い	0.9×0.65×0.15	なし	
SK-13	いびつな方形	0.8×0.9×0.3	なし	内部に15~30cm大の石が3個存在
SK-14	長方形に近い	2.0×0.7×0.2	なし	検出面に15~20cm大の板石
SK-15	いびつな隅丸方形	1.0×1.0×0.2	須恵器小片	土壌検出面付近より出土
SK-16	方形	0.65×0.75×0.1~0.2	なし	
SK-17	長方形	1.25×0.65×0.1~0.25	なし	
SK-18	いびつな方形	0.8×0.8×0.15~0.2	なし	

(2) 土壌中の出土遺物

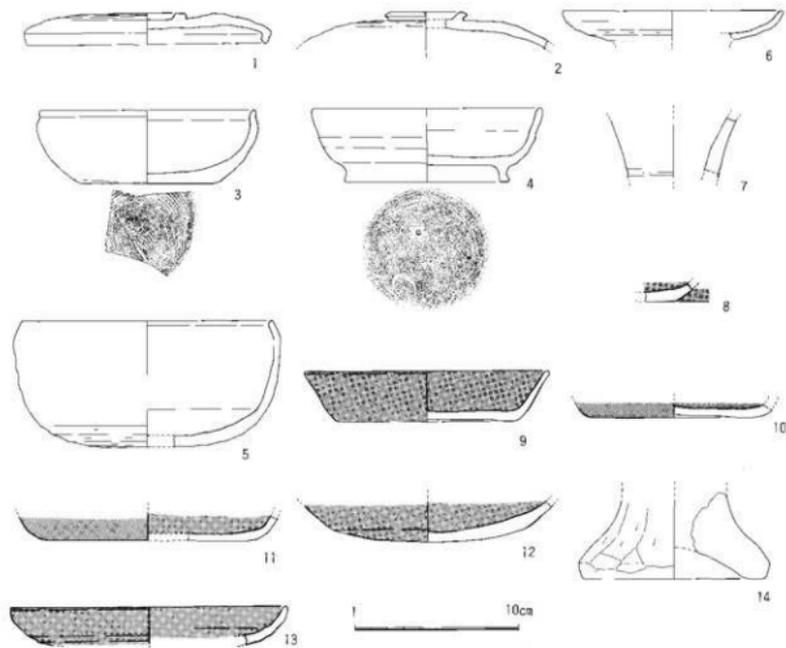
①SK-01の出土遺物(第13図)

須恵器(1~7) 1は輪状つまみ付きの蓋で口縁端部は垂直に下がる。2も輪状つまみ付きの蓋であるが、1より器高が高い。3は口縁部がくびれる糸きりの環、4は高台が底部端よりやや内側に付く高台付きの環である。回転糸きり後軽くナデる。5は口縁が内湾し、体~底部に回転ヘラケズリを施して丸底に作る鉄鉢形土器である。6は台又は脚の付く皿状の器形のもの、7は壺の頸部で外面に沈線が1条巡る。

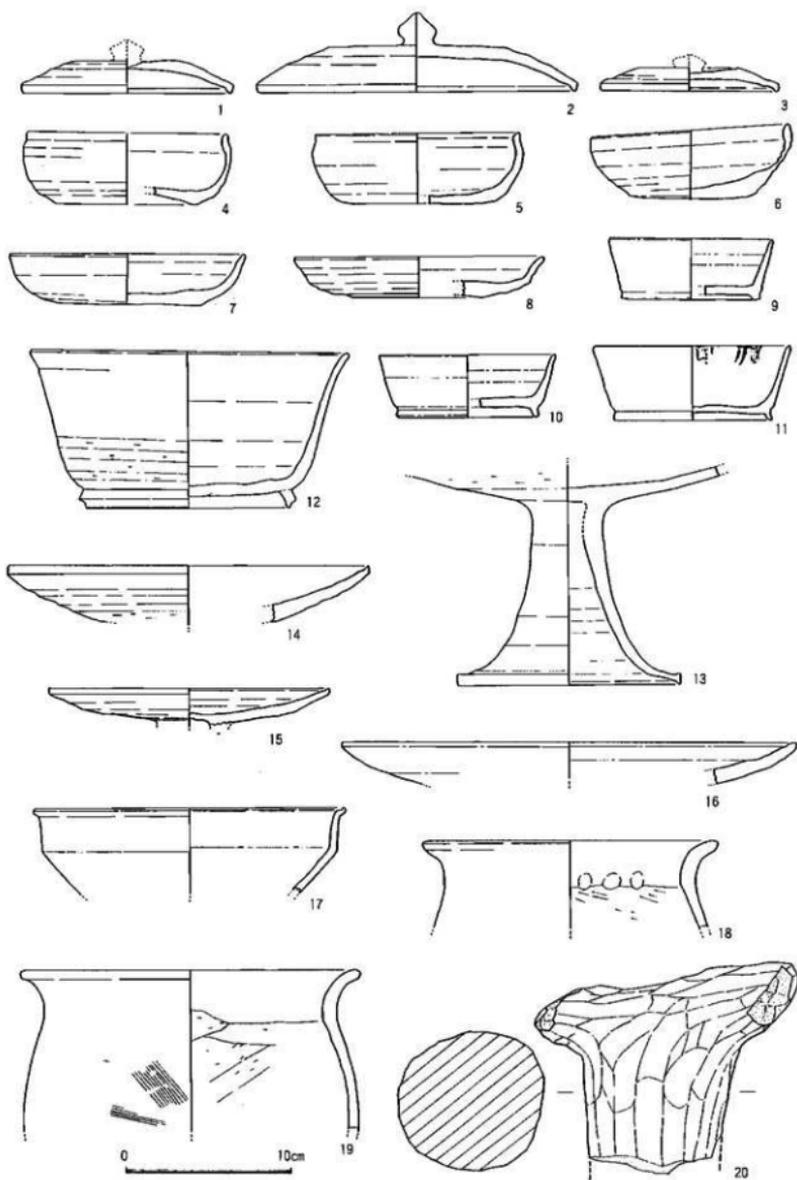
土師器(8~14) 8~13は赤色顔料を塗彩される。底部の残るものは回転糸きり痕をもっている。8は底部の小片、9は口縁の外傾する平底の環、10、11は平底の底部のみ残存する。12は回転糸きりであるが丸みを帯びた底部をもつ。13は皿かと思われる。14は土製支脚の底部片で指頭圧痕とヘラケズリが見られる。

②SK-02の出土遺物

下層出土遺物(第14図1~20、第18図2)



第13図 SK-01 出土遺物(網かけは赤彩土師器)



第14図 SK-0 2下層出土遺物

須恵器・蓋（1～3）いずれも天井部は平らで、口縁端部は断面三角形の鳥嘴状を呈し、2には宝珠状のつまみが付く。

須恵器・杯（4～7）4～6は口縁部がわずかにくびれ、底部は回転糸きりのもの、8は浅い杯としたが皿の可能性もある。

須恵器・皿（8）口縁は体部から屈曲して外反し、底部は回転糸きりされる。

”・高台付杯（9、10、12）9、10は底部端に高台が付き、口縁が直線的に伸びる。12は口径19.2cm、器高9.6cmを測る大形のもので、口縁部はやや外反し、底部端近くに付く高台は内端で接地する。体～底部は回転ヘラケズリである。切り離しは回転ヘラ切りと考えられる。

上節器・高台付杯（11）口縁は直線的に伸び、回転糸きり痕をもつ。灯明皿として使われたとみえ、口縁端部内面に油煙が5ヶ所ついている。

須恵器・高杯（13～16）13は浅い杯部をもち、裾近くで脚の大きくひらくもの、14は口縁端部が断面三角状をなすもの、15は断面は灰色であるが、表面が酸化炎焼成に近い肌色を呈するもの、16は口縁端部を丸く仕上げ上げるものである。

須恵器・鉢（17）体部に稜をもち、口縁端部は外方へ屈曲する。

”・甕（第18図2）ほぼ完形に復元できるもので、口径13.0cm、器高（推定）44.6cmを測る。口縁部は短く外湾し、体部最大径は器高の3分の2あたりにある。外面は平行タタキ、内面は背海波文タタキで成形され、粘土の積み上げ痕が顕著である。SK-02F層から口縁部が出上し、SK-06から胴～底部が出土し接合した。

土師器・甕（18、19）いずれも口縁部が外湾し、胴張りの少ないもので、外面はハケ目を施し、内面はヘラケズリしている。

土製支脚（20）頂部を三叉に作り、全体をヘラケズリする。

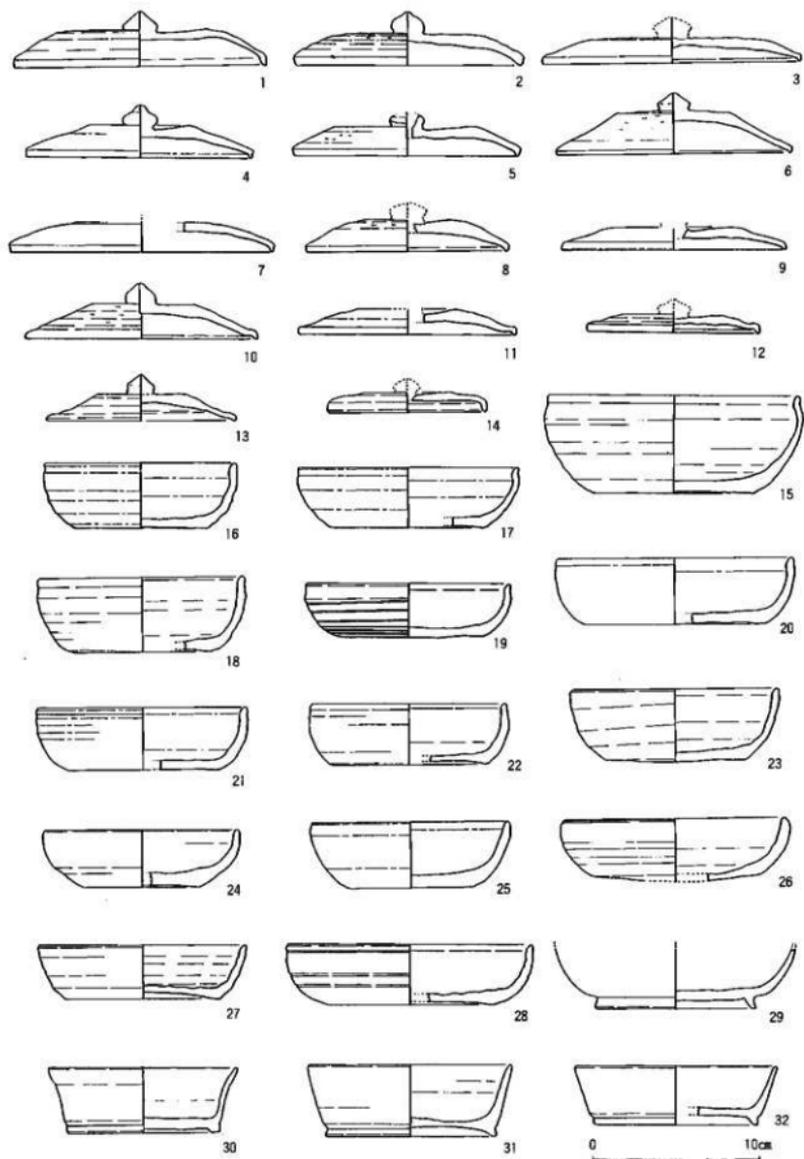
#### 上層出土遺物（第15～18図）

須恵器・蓋（第15図1～14）1～13は杯蓋と思われる。つまみは残存しているものはすべて宝珠状である。天井部は平らではあるがやや丸みを感じさせ器高の高いもの（1）と低いもの（2、3、7）、天井部の平坦面と口縁部の境にははっきりした稜があり器高の高いもの（4、6、10、13）と低いもの（5、9、11、12）の4種類に大別できる。口縁端部は1だけが垂下し、2～13は断面三角状をなす。3と4は酸化炎焼成に近い肌色を呈す。14は蓋の蓋であろう。

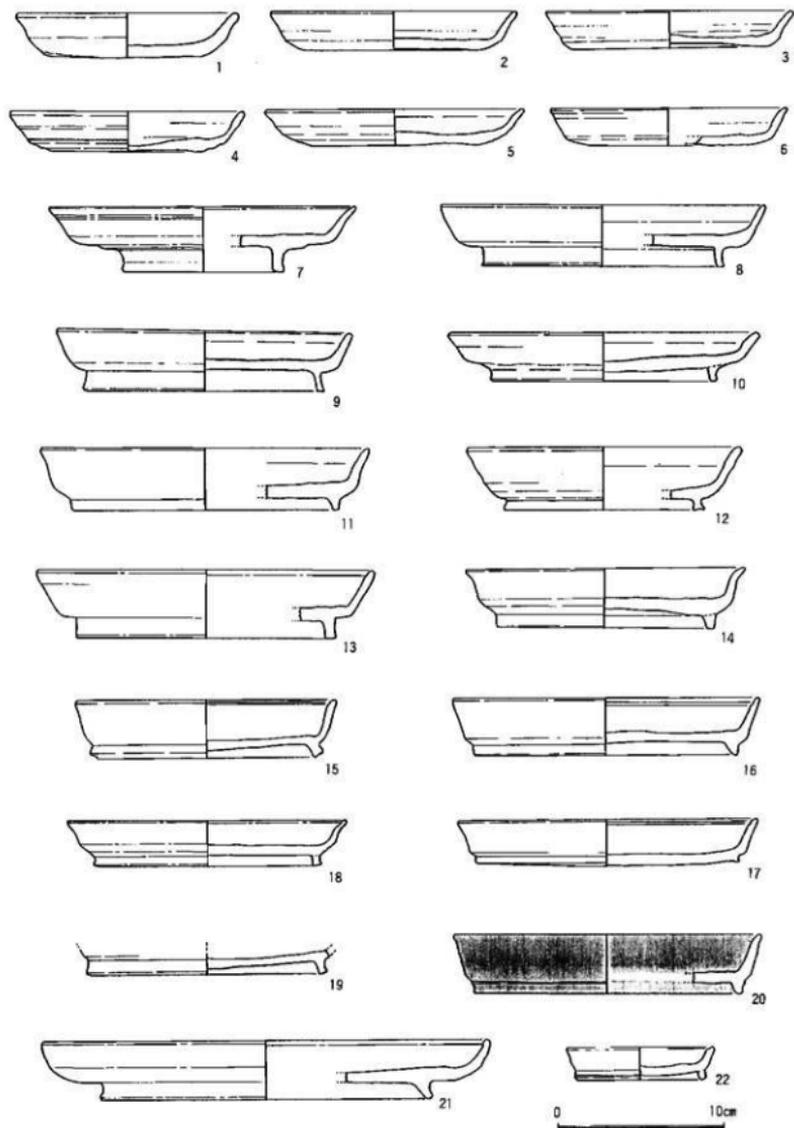
須恵器・杯（15～28）口縁部のくびれるもの（15～22）と内湾するもの（23～28）の二通りがある。前者はくびれがはっきりして体部に張りのあるものから、くびれが形骸化してしまったものまで変化に富んでいる。切り離しは15～21が回転糸きり、22が静止糸きりによる。後者のうち27、28は浅手のものである。切り離しは23～27が回転糸きり、22が静止糸きりによる。

須恵器・高台付杯（29～32）29は底部端よりやや内側に細い高台の付く体部の丸いもの、30は底部端に高台が付き、口縁は直線的に伸びた後わずかに外反するもの、31、32は直線的に外傾するものである。切り離しは30が静止糸きりで他は回転糸きりによる。31の底部外面にはラセン状のヘラ記号がある。

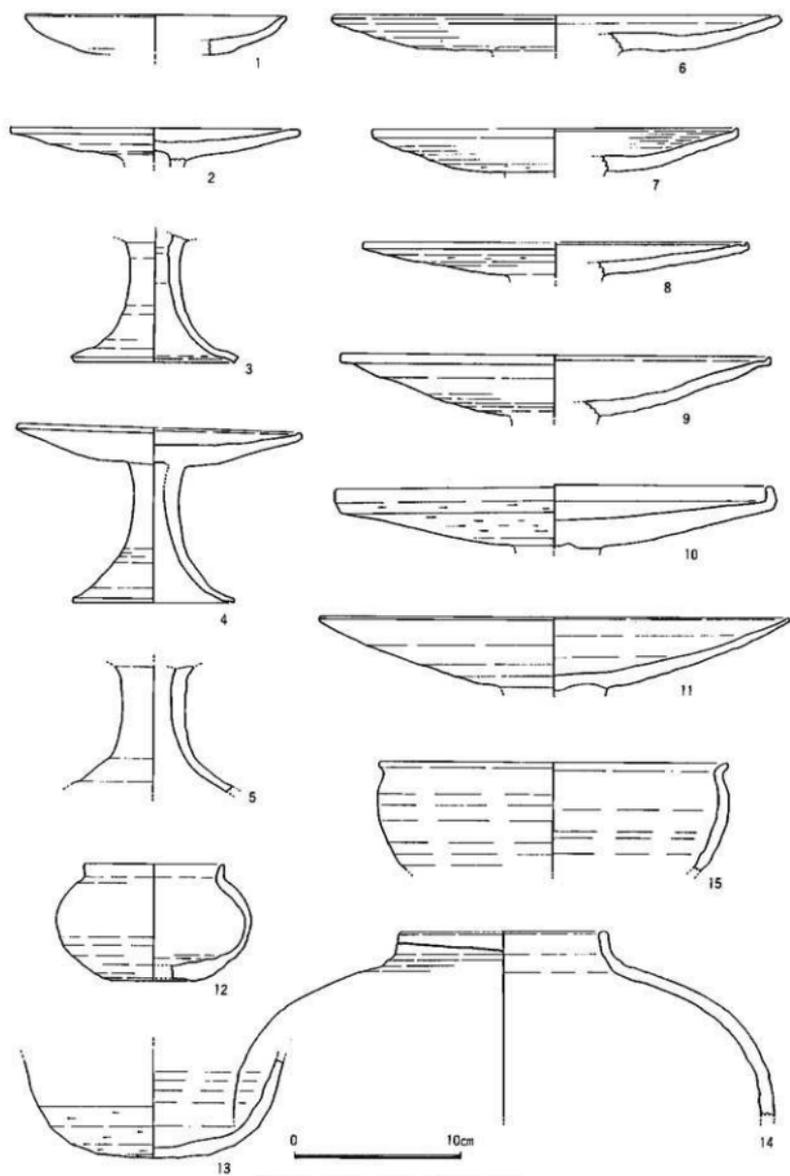
須恵器・皿（第16図1～6）口縁部は軽く外反するものがほとんどである。切り離しは3が静止糸き



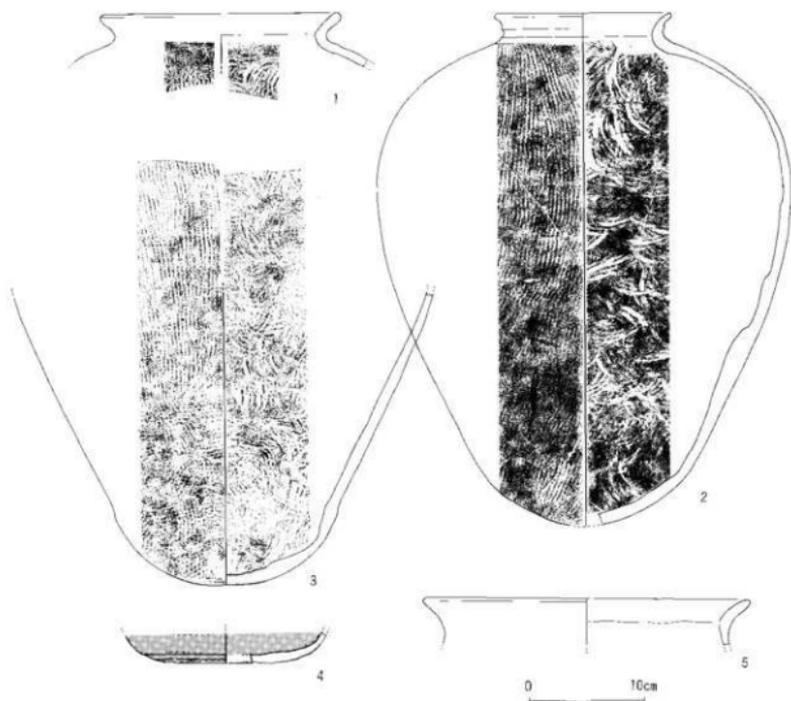
第15図 SK-02 上層出土遺物



第16図 SK-02上層出土遺物（網かけは赤彩土師器）



第17図 SK-02上層出土遺物



第18図 SK-02 出土遺物（網かけは赤彩土師器）

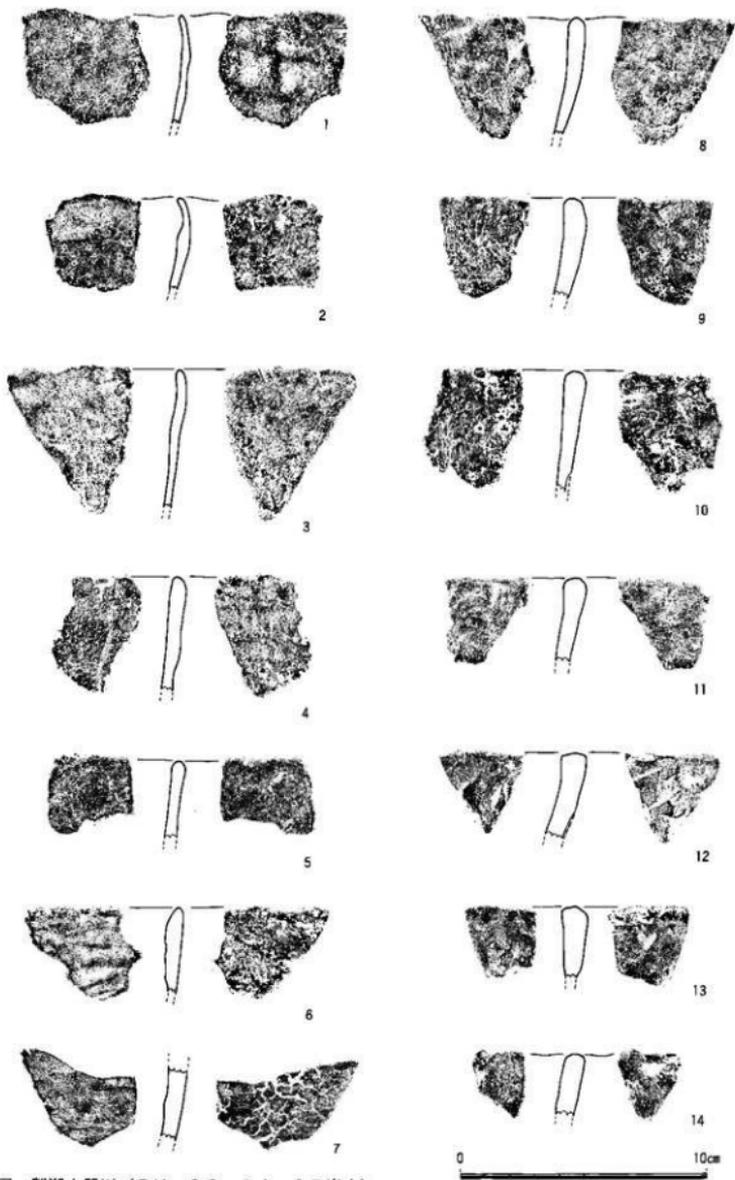
りで、他は回転糸きりによる。

須恵器・高台付皿（7～19、21、22）高台の付く位置、高台の形、口縁の形態（外傾するか、外反するか、内湾するか）等で変化に富んでいる。口縁内面に沈線を巡らすもの（15～18）もある。高台は17はつまみ出して作り、他は貼付けている。切り難しは糸きりによるものがほとんどであるが、ヘラ切り後回転ヘラケズリを行っていると思われるもの（15、19）もある。22は口径8.7cmの小皿で、口縁端部内面に沈線を巡らし、底部をヘラケズリするものである。

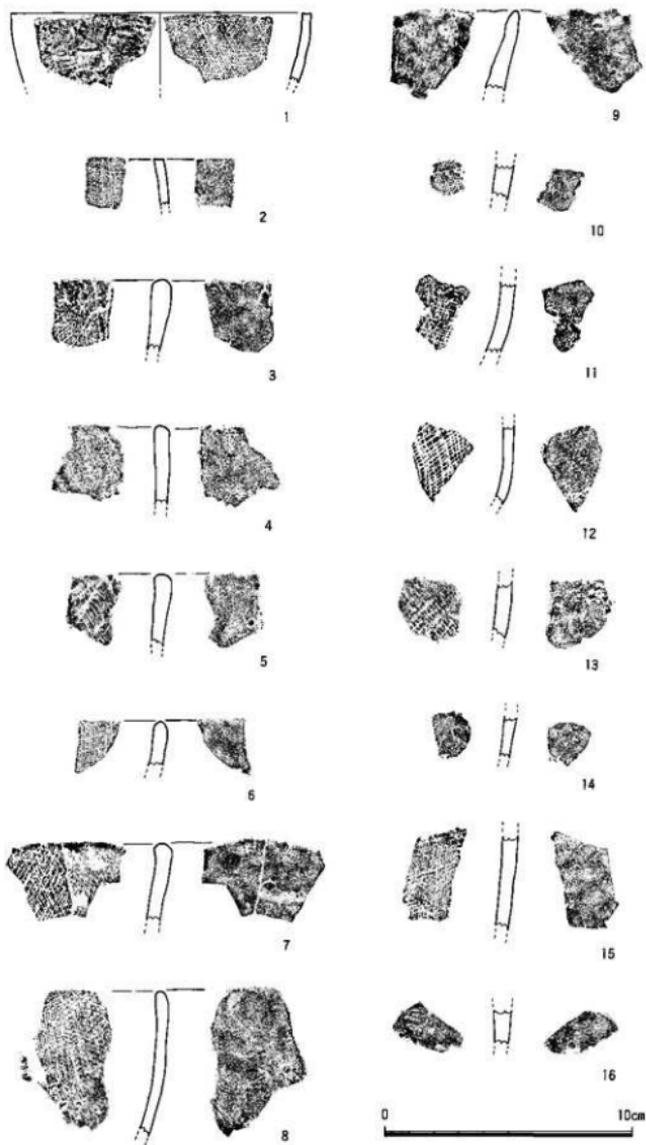
土師器・高台付皿（20）赤色顔料が全面に塗彩されている。底部は回転糸きりである。

須恵器・高杯（第17図1～11）4は完形になるもので、口径16.8cm、器高10.7cmを測る。杯部は浅く、口縁端部は上向きの三角状をなし、脚部は円筒状の筒部から脚端にむけて自然に開く。7～9、11は4を大形にしたもの、2と6は口縁端部を丸く単純につくるもの、10は瓦質の焼成の浅い杯部で、口縁端部は直立し、外面には回転ヘラケズリが行われる。

須恵器・壺（12～14）12は短頸甕、13は体～底部をヘラケズリする丸底のもの、14は薬壺形のもので



第19圖 製潮土器(1) (SK-02.04.07出土)



第20図 製埴土器(2) (SK-02.04出土)

平行タタキの後回転ナデが行われる。

須恵器・鉢(15) 口縁部は「く」の字状に短く屈曲する。

須恵器・甕(第18図1、3) 1は口径20cmの口縁部、3は胴～底部でいずれも外面は平行タタキ、内面は青海波文タタキで成形される。

土師器(4、5) 4は赤色塗彩された底部片で、周縁部には回転ヘラケズリが施される。5は甕口縁部である。ヨコナデと内面頸部以下にヘラケズリが行われる。

製塩土器(第19図、第20図) 焼塩用の製塩土器片が167片出土している。SK-02だけでなくSK-04、07、包含層中のもも含めた数字であるが、SK-02以外からはそれぞれ数片ずつ出ているだけである。残存数センチの小破片ばかりであるが、指頭圧痕や指ナデの顕著なもの、内面に布目痕の残るもの、器壁が摩耗剥離しているもの、器表に独特のひびわれのあるもの、部分的に赤変や黒変したものなど製塩土器の特徴をそれぞれによく表している。167片のうち口縁部が98片あり、残りは胴部片である。同一個体と思われるものが相当あったが接合しなかったので単純に計算し合計した。第19図1～3は器壁が比較的薄いもので、指頭圧痕やナデがあり、口縁が波打っている。4～14は器壁が比較的厚く、口縁が波打たないものである。第20図1、2は内面に布目痕があり、口縁端部を水平にカットするもの、3～9は内面に布目痕があり、口縁の断面が分厚く丸いものである。10～16は布目痕のある胴部片である。布目痕は細かいものから粗いものまでさまざまあり、何回も使用したせいか布目が緩んでだれたものもある。焼塩土器は人別して二種あるとされ、その1つは手拵で器壁が薄く底部が尖る形式のものであり、他の1つは砲弾状となるもので、その特徴は器壁が薄いもの、厚いもの、内面に布目痕のみられるもの、そうでないものなどさまざまである。そして前者は後者に先行する形式と<sup>(注2)</sup>考えられている。今回の出土品はほとんどが後者の範疇に入るものであるが、第19図1～3は前者の可能性もあるかもしれない。

### ③SK-03の出土遺物(写真図版7)

須恵器・高台付皿 底部が2個体あり、高台が直立するものと少し開いて細く高いものがある。外面には静止米きりと回転ナデが見られる。

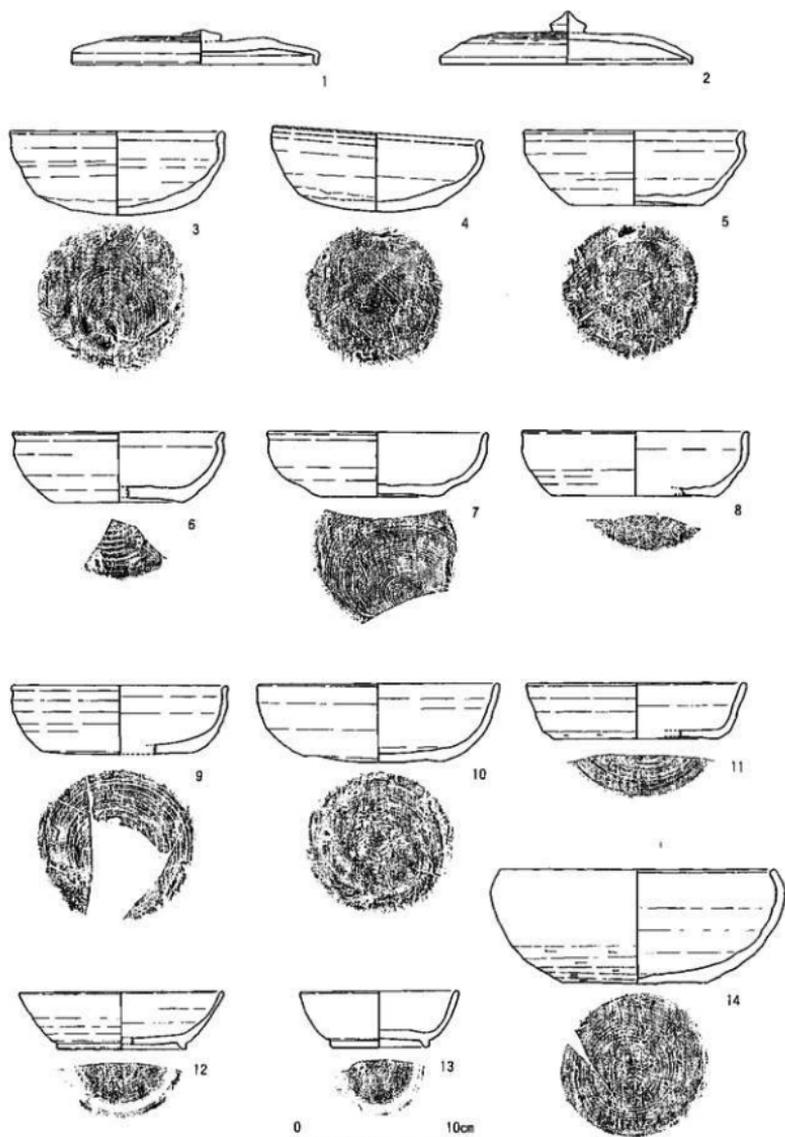
### ④SK-04の出土遺物(第21～24図)

須恵器・蓋(第21図1、2) 1は低い宝珠状つまみが付き器高は低く口縁端部は垂下する。2も宝珠状つまみ付きで平な天井部からゆるやかに口縁部に下がり、端部は断面三角状を呈する。

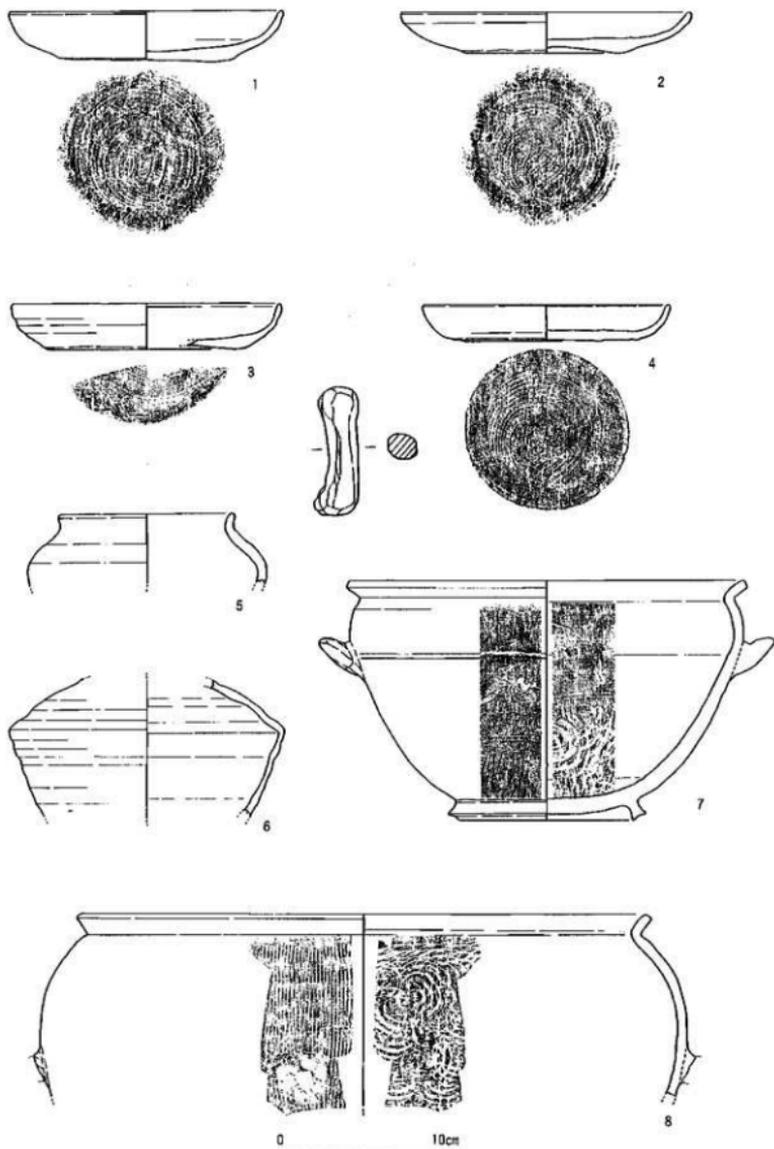
須恵器・環(3～11) 口縁がくびれて丸底のもの(3、4)、口縁がくびれて平底のもの(5～9)、体部は丸みを帯び、口縁は真つすぐ伸びて端部に至るもの(10)、平底から直線的に開く器高の低いもの(11)がある。切り難しは丸底のものも平底のものもすべて回転米きりによる。11は底部外縁を回転ヘラケズリしている。

須恵器・高台付杯(12、13) 12は口縁が内湾気味に伸びて開く碗形のもの、13は口径9.6cmを測る小碗形のものでいずれも切り難しは回転米きりである。

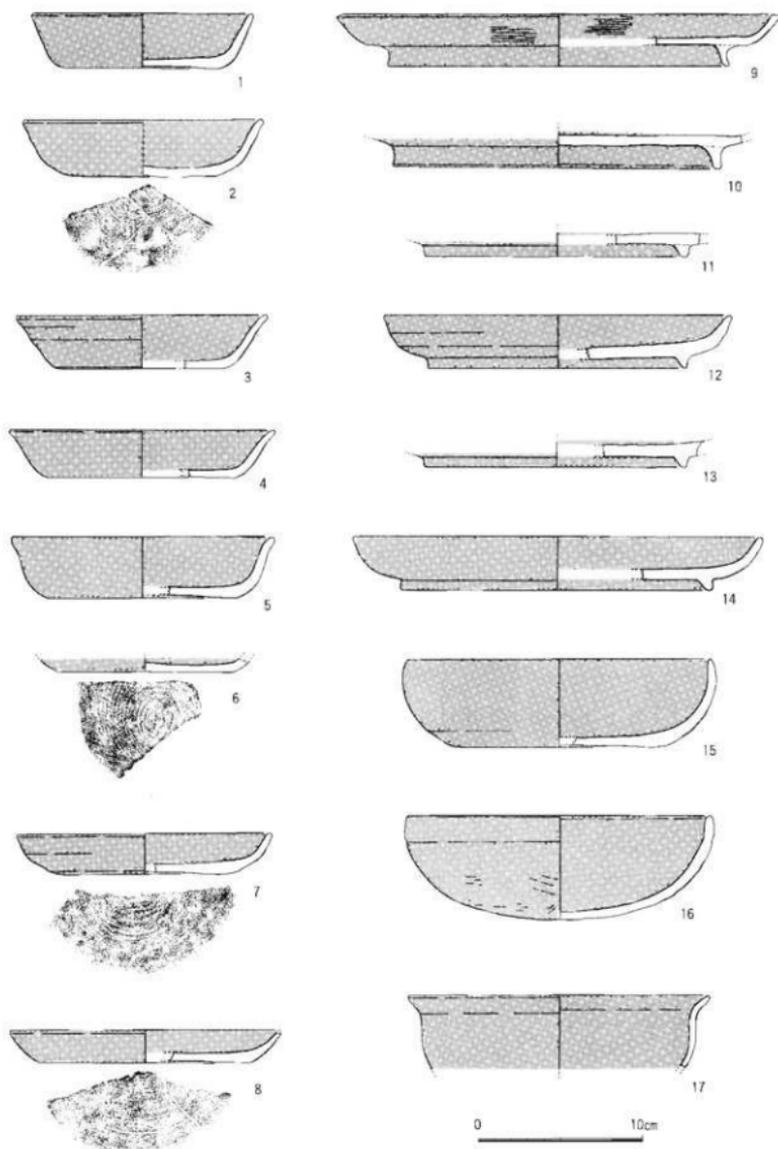
須恵器・鉄鉢形土器(14) 口径16.6cm、器高7.1cmのもの。口縁は内湾し、体～底部は回転ヘラケズリが施されて平底となっている。底部外面中央に米きり痕が残る。



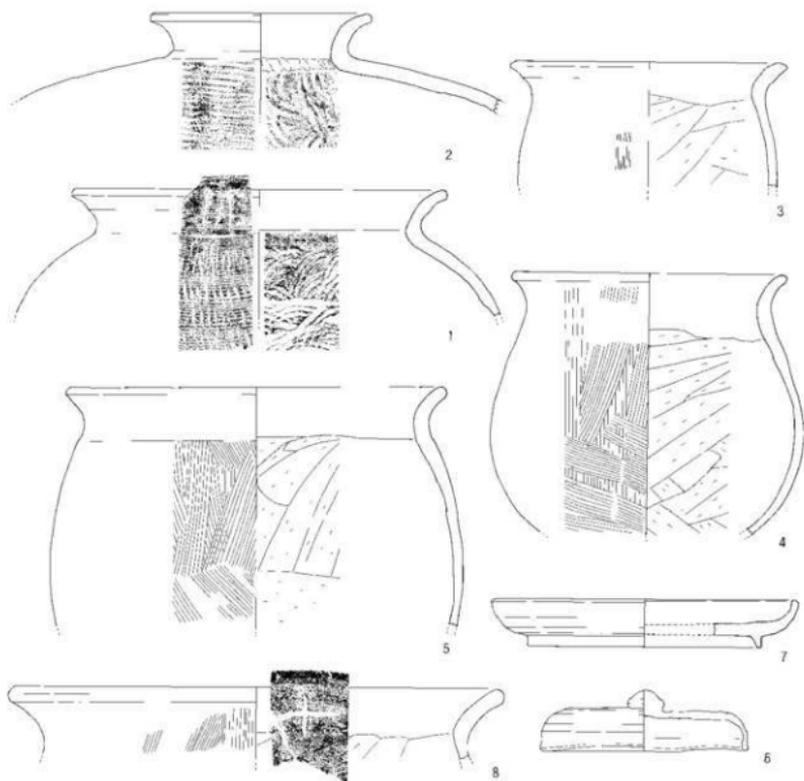
第21図 SK-04 出土遺物(1)



第22図 SK-04 出土遺物(2)

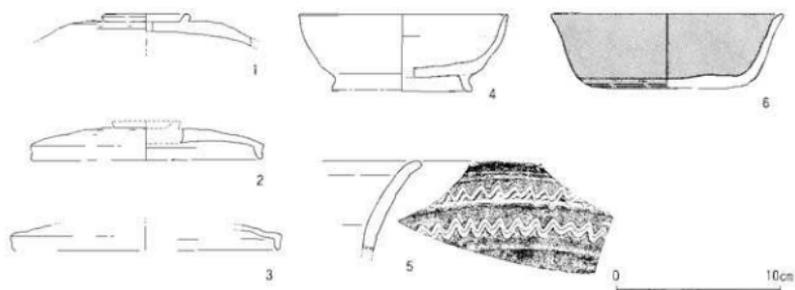


第23図 SK-04 出土遺物(3) (網かけは赤彩土師器)



第24図 SK 0 4 (4). SK 0 4隣接土壌出土遺物

0 10cm



第25図 SK-0 5 出土遺物 (網かけは赤彩土師器)

0 10cm

須恵器・皿（第22図1～4）体～口縁は内湾するが底部の大きさによって種々の形態をとる。切り離しはすべて回転糸きりによる。

須恵器・壺（5、6）5は短頸壺、6は長頸壺の肩の屈曲部である。

須恵器・甕（7、8、第24図1）7、8は口頸部が「く」の字に屈曲し胴部に把手をもつものである。7は丸底に高台が付く。3点共平行タタキと青海波文タタキで成形されるが7は内外面とも把手の下あたりまで回転ナデでタタキを消している。第24図-1は口縁外面に「++」のヘラ記号が見られる。

須恵器・横瓶（第24図-2）推定口径10.8cmを測り、外面平行タタキ内面青海波文タタキで成形される。

赤彩土師器・杯（第23図1～6、15）胎土は精良で全面に塗彩される。底部は回転糸きりで調整は回転ナデである。平底から直線的に開くもの（1）と外反して開くもの（3～5）、内湾形態の大形品（15）がある。

赤彩土師器・皿（7、8）胎土は精良で全面に赤彩される。底部は回転糸きりされる。

赤彩土師器・高台付皿（9～14）胎土は精良で全面に赤彩される。ヘラミガキするもの（9～11）と回転ナデをするもの（12～14）がある。底部は糸きり後調整される。

赤彩土師器・鉢（16、17）16は半球形の鉄鉢形土器で顔料は茶色がかっている。口縁部内外面はヨコナデ、体～底部外面は手持ちヘラケズリが施される。17は口縁部の外反する鉢形土器と思われる。

土師器・甕（第24図3～5）口径はそれぞれ16.8cm、16.2cm、23.0cmを測る。

#### ⑤SK-04 隣接土壌の出土遺物（第24図6～8）

6は粟甕形の壺に作る須恵器の蓋、7は須恵器の高台付皿である。8は土師器の甕口縁部で内面に「十一」の記号が焼成前につけられている。

#### ⑥SK-05の出土遺物（第25図）

1～3は須恵器の杯蓋である。1は輪状つまみが付くもの、2、3は口縁端部が垂直に下がるものである。4は須恵器の高台付杯で丸みのある体部をもち、高台内は糸きり後ナデている。5はややだれた波状文が2段に施された須恵器の甕の口縁部、5は赤彩土師器の杯である。5の口縁は直線的に開いて端部近くで少し外反し、底部外縁は回転ヘラケズリされる。

#### ⑦SK-06の出土遺物（第26図）

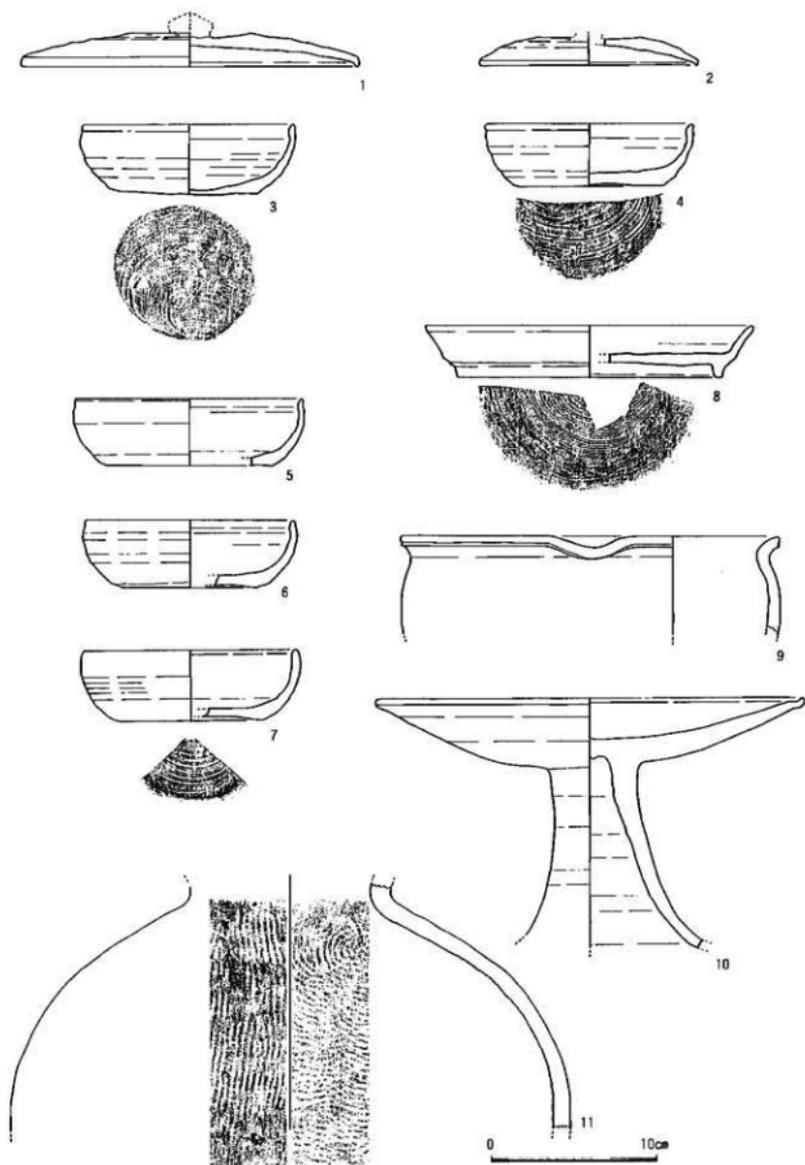
須恵器・蓋（1、2）どちらも焼成は悪く軟質で乳白色をしている。1は口径20cmと大形である。

須恵器・杯（3～7）口径がくびれるもの（3～6）と内湾したまま単純なおわるもの（7）がある。切り離しはすべて回転糸きりによる。

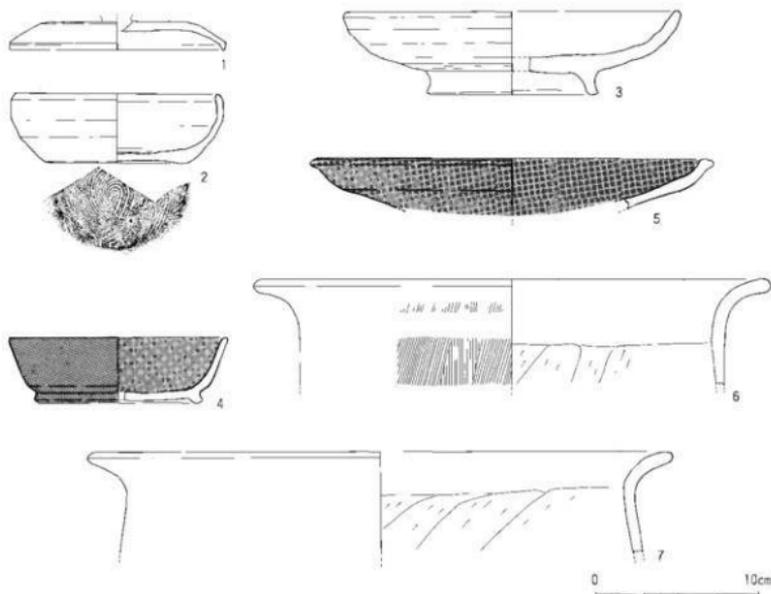
須恵器・高台付皿（8）口縁は外反し高台は底部端寄りに付く。回転糸きりされる。

須恵器・片口鉢（9）注ぎ口のある鉢である。回転ナデが施される。

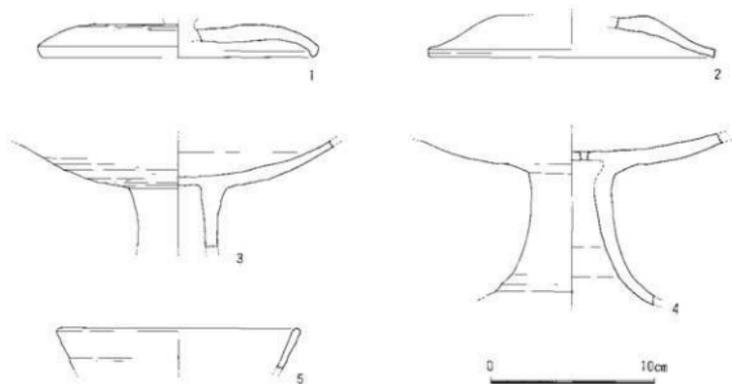
須恵器・高杯（10）口径25.4cmを測り、浅い杯部をもつ。焼成不良で灰白色を呈する。



第26図 SK-06 出土遺物



第27図 SK-07出土遺物（網かけは赤彩土師器）



第28図 SK-09出土遺物

須恵器・甕(11) 胴張りのする器形で外面は平行タタキ、内面は青海波文タタキである。

⑧SK-07の出土遺物(第27図)

1は口縁端部が断面三角状の須恵器杯蓋、2は体へ口縁部が内湾する須恵器の坏で切り離しは回転糸きりによる。4は赤彩土師器の高台付坏、5は赤彩土師器の高坏と考えられるものでヘラミガキが若干残っている。口縁端部は水平面をなし、そこに沈線が1条巡る。6、7は土師器の甕である。胴張りはほとんどなく、外面にはハケ目、内面にはヘラケズリが見られる。

⑨SK-09の出土遺物(第28図)

須恵器・蓋(1、2) 1は低い天井部に糸きり痕をもつもの、2は天井部は平らで器高の高いものである。

須恵器・高坏(3、4) 3は坏部と脚部の接合部分が残存する。4は坏部底面の中心よりややずれた位置に直径5ミリの円孔が穿たれている。焼成は悪く、表面は灰白色、断面は淡橙色を呈す。

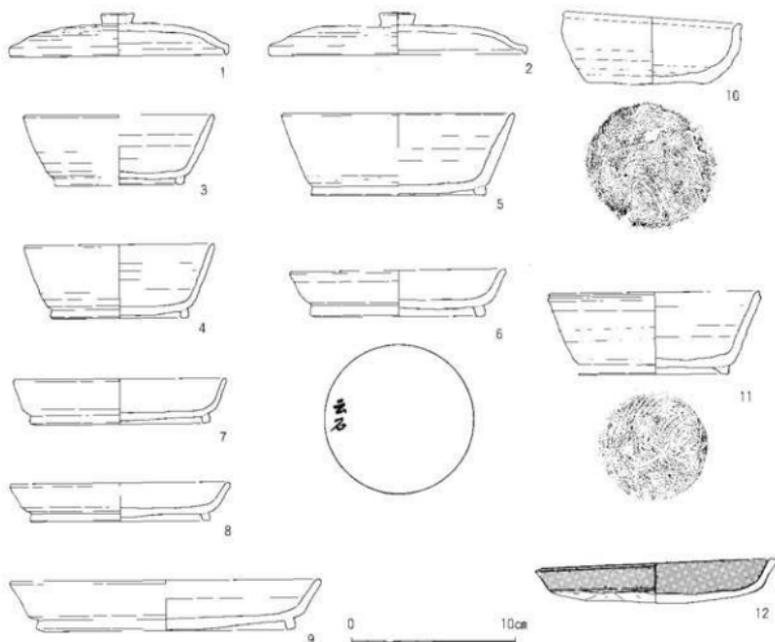
⑩SK-10の出土遺物(第29図)

須恵器・杯蓋(1、2) 1は口径13.2cm、器高2.6cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされやや丸みを帯び、口縁端部は垂直に下がる。頂部には釘状の偏平つまみが付く。2は口径15.6cm、器高2.6cmを測る。1と同様の作りであるが、口径が大きい分、天井が平たくなっている。1、2とも胎土中に1ミリ前後の砂粒を含み、焼成は良好かつ堅緻で、灰色を呈す。外面には黄緑色の自然釉がかかる。須恵器・高台付坏(3~5、11) 3は口径11.6cm、器高4.4cm、底径7.9cmを測る。高台は底部端寄りに直立して付き、口縁部は直線的に伸びて開く。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリされる。4は口径11.6cm、器高4.5cm、底径8.4cmを測る。作りは3と同様である。5は口径14.2cm、器高5.0cm、底径10.6cmを測る。作りは3、4と同様であるが底部外面の中央部に回転ヘラ切り痕が残る。3~5の胎土、焼成、色調は蓋と同一である。3、4には蓋1が伴い、5には蓋2が伴うものと思われる。11は口径12.6cm、器高5.05cm、底径9.2cmを測る。口縁端部外面に沈線が巡り、切り離しは回転糸きりである。形態は3~5と似ているが、胎土、色調、手法などちがったものとなっている。

須恵器・坏(6) 口径10.8cm、器高3.7~4.5cm、底径7.6cmを測る。口縁がわずかにくびれるもので、底部は回転糸きりされる。胎土に砂粒を多く含み、暗褐色~茶褐色を呈する。

須恵器・高台付皿(6~9) 6は口径13.1cm、器高2.85cm、底径10.6cmを測る。切り離しは回転ヘラ切りで、最後の調整は回転ナデである。底部外面には「云石」の墨書と、筆の太さの違うかすかな墨痕が一面に残る。1ミリ前後の砂粒を多く含み、焼成は一部軟質で灰白色を呈する。7は口径13.0cm、器高2.75cm、底径11.0cmを測る。形態は6とはほぼ同じであるが焼成は悪く摩滅している。8は口径13.4cm、器高2.3cm、底径11.0cmを測る。7と同様に軟質の焼成である。底部は回転ヘラケズリされる。胎土、色調共6、7と同一である。9は口径19.0cm、器高3.05cm、底径15.8cmを測る。6~8の法量を大きくしたもので底部はヘラケズリされる。胎土、焼成、色調とも6と同一である。

土師器・皿(12) 口径14.7cm、器高2.0~2.9cmを測る。赤橙色の顔料が底部外面を除き塗彩されている。底部は手持ちヘラケズリが行われる。



第29図 SK-10 出土遺物実測図（網かけは赤彩土師器）

㊦ SK-11 の出土遺物（写真図版11）

須恵器高台付皿は回転系きりのもの、須恵器高杯は口径23.2cmと28.8cmを測る。

㊧ SK-12 の出土遺物（第30図）

須恵器・蓋（1）平らな大弁部に宝珠状のつまみが付く。

須恵器・高台付杯（2）「ハ」の字に開く高台が付く小片である。

須恵器・高台付皿（3～7）3～6は底部端よりやや内側に高台が付き回転系きりのもの、7は低い高台が底部端に付くもので摩滅して調整不明である。口径22.8cm、器高3.45cmを測る。

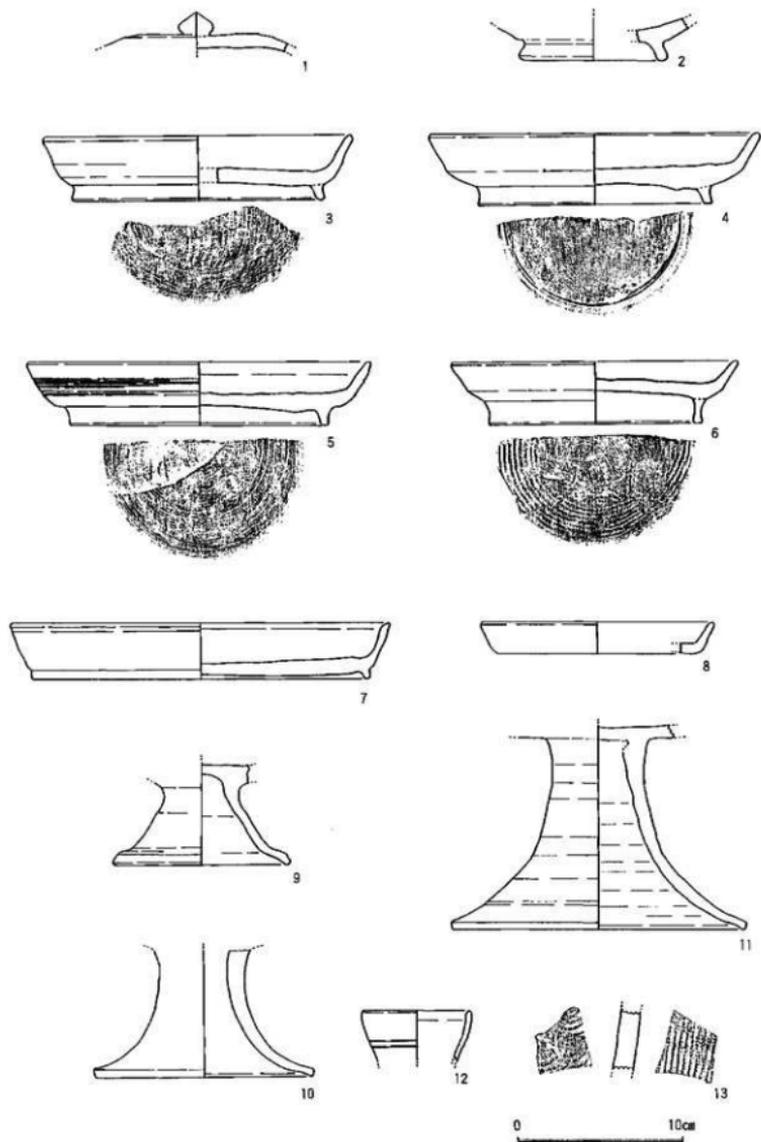
須恵器・皿（8）ごく浅い平底のもので回転系きりされる。

須恵器・高杯（9～11）9は脚端部に緩やかな段がつき、10、11は筒部から脚端に向かって外筒しつつ大きく開くものである。焼成不良により軟質で乳灰色～乳白色を呈す。

須恵器・壺（12）直口壺口縁部の小片で外面に沈線状のわずかな段がある。

須恵器・壺（写真図版11）いずれも外面平行タタキ、内面青海波文タタキで成形される。

土製支脚（写真図版11）頂部を三枝に作るものである。



第30図 SK-1 2 出土遺物

(3) 土墳墓 (SX-01~06)

① SX-01 (第31図)

平面形: 長方形

法 量: 掘り方 長辺1.3m、短辺95cm、深さ50cm

木 棺 (推定) 長辺95cm、短辺45cm

出土遺物: 銅銭5枚、土師質土器4個 (遺構検出面1、墳底3)、鉄釘15本

時 期: 中世後期

② SX-02 (第31図)

平面形: 長方形



第31図 SX-01~04 実測図

法 量：掘り方 長辺1.4m、短辺1.1m、  
深さ85cm  
木 棺（推定）長辺92cm、短辺  
52cm

出土遺物：銅銭（無文銭を含めて約100枚）、  
十師質土器1個、鉄釘31本

時 期：中世後期

③SX-03（第31図）

平 面 形：長方形

法 量：掘り方 長辺85cm、短辺60cm、深  
さ20cm

出土遺物：なし

時 期：中世後期か

④SX-04（第31図）

平 面 形：長方形

法 量：掘り方 長辺1.3m、短辺85cm、深さ35cm

出土遺物：土師質土器2個

時 期：中世後期

⑤SX-05（第31図）

平 面 形：長方形

法 量：掘り方 長辺1.25m、短辺1.0m、深さ75cm

出土遺物：土師質土器2個（遺構検出面1、墳底1）、鉄釘1本

時 期：中世後期

⑥SX-06（第32図）

平 面 形：長方形

法 量：掘り方 長辺1.5m、短辺1.1m、深さ1.0m

出土遺物：土師質土器2個、鉄釘2本、木片少量

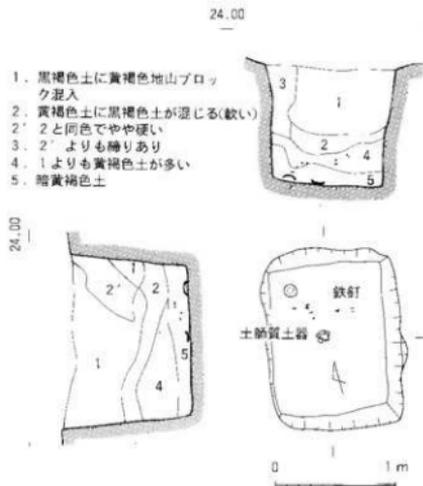
時 期：中世後期か

（4）土墳墓中の出土遺物

①SX-01の出土遺物（第33図、第35図、写真図版12）

銅銭 或平元寶1枚、聖〇寶1枚、不明3枚の計5枚ある。不明の3枚は銹着して分離不能である。

土師質土器（第35図1～4）1は口径8.8cm、器高2.0cmを測り、ナデがある。2は口径11.4cm、器高



第32図 SX-06実測図

2.6cmを測り、口縁部はヨコナデ、体～底部外面は指頭圧痕とナデ、内底面は「の」の字状のナデがある。3と4はどちらも口径11.4cm、器高2.4cmを測り、2と同様のつくりである。

鉄釘 15本ある。全長のわかるものは3～4.5cmあり、断面は四角で頭部は折り曲げられ、木棺の木質が残っている。

②SX-02の山上遺物（第34図、第35図、写真図版12）

銅銭 開元通寶1枚、洪武通寶4枚、不明2枚、無文銭90枚以上の計100枚前後ある。こぶし大にかたまって出土しており、布袋に入っていたらしく粗い布の織維が付着している。また塊の直下には8×4cm大、厚さ4ミリの木片が残っていた。木棺の一部と考えられる。

上師質土器（第35図5）口径11.0cm、器高2.5cmを測り、底部には回転糸きり痕がある。

鉄釘 30数本ある。3cm大、5cm大、7cm大の3種類があり、木質が付着している。



成平元宝



聖〇〇宝

第33図 SX-01出土銭



開元通宝



〇武通宝



洪武通宝



洪〇〇宝



洪〇〇〇



不明



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



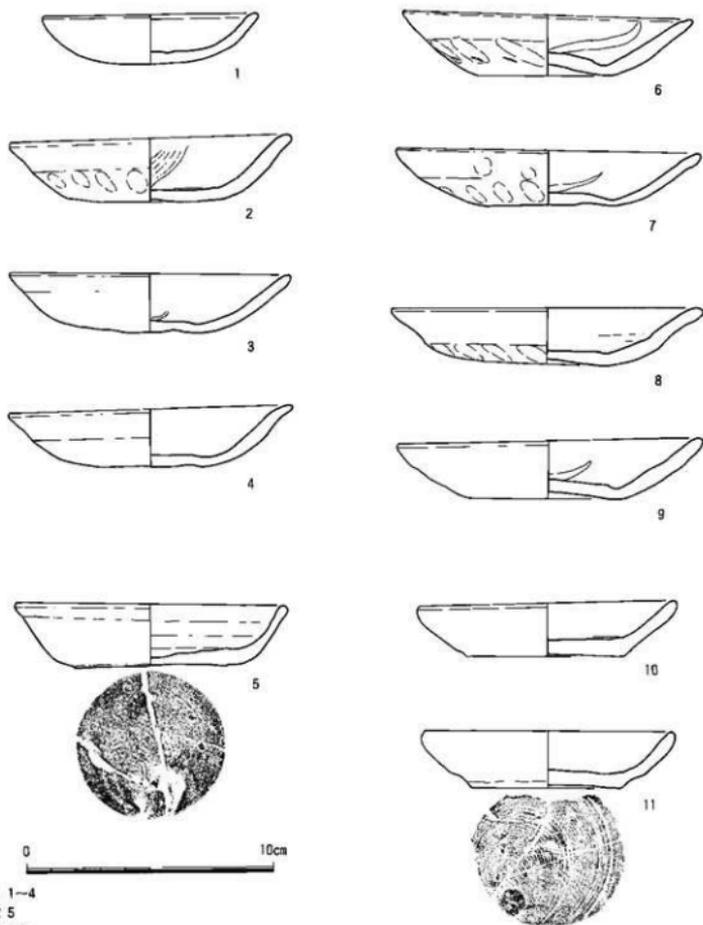
20



21

7～21は無文銭

第34図 SX-02出土銭（1：1）



SX-01 1~4  
 SX-02 5  
 SX-04 6.7  
 SX-05 8.9  
 SX-06 10. 11

第35圖 SX-01~06出土土師質土器実測図

③SX-04の出土遺物(第35図)

土師質土器 6は口径11.7cm、器高2.5cmを測り、口縁部はヨコナデ、体～底部外面は指頭圧痕とナデ、内底面は「の」の字状にナデ上げられる。7は口径12.2cm、器高2.2cmを測り、6と同様のつくりである。

④SX-05の出土遺物(第35図)

土師質土器 8は口径12.5cm、器高2.3cmを測り、口縁部ヨコナデ、底外面指頭圧痕、内面「の」の字状のナデが施されるもの、9は口径12.2cm、器高2.4cmを測り、8と同様のつくりのものである。

鉄釘 1本だけ残る。全長は不明。

⑤SX-06の出土遺物(第35図)

土師質土器 11は口径10.2cm、器高2.35cmを測り、底部は回転糸きりされて平底で、口縁が少し内湾気味のものである。10は口径10.5cm、器高2.2cmを測り、2と同様の形態のものであるが、底部は摩滅している。

鉄釘 2本残存しているが全長は不明である。

(5)ピット群(第3図)

SX-05の西側から西南にかけて60余を数える柱穴状のピットが発見された。ピットは直径20～40cm深さは20～50cmを測る。須恵器の細片(時期不明)の出土したピットが1穴だけあった。建物跡は確認できなかった。

2. 西調査区

(1)掘立柱建物とピット列

①SB-01(第36図)

規模 桁行3間(4.5m)、梁行2間(3.1m)の東西棟建物  
柱間寸法 桁行 北面1.5m等間、南面西から1.6m～1.6m～1.3m  
梁行 東面北から1.6m～1.5m、西面北から1.6m～1.5m  
柱穴寸法 掘り方22～30cm、深さ50～80cm  
出土遺物 ピット中に須恵器細片

②SB-02(第37図)

南北方向だけの確認なのでピット列とすべきなのかもしれないが、掘り方の大きさや深さ、SD02を伴う可能性があることなどを考え合わせて建物とした。

規模 南北は3間(4.8m)または3間以上(北へ伸びる可能性)、東西は不明  
柱間寸法 南から2.0m～1.7m～2.1m  
柱穴寸法 掘り方60cm前後、深さ70cm前後

出土遺物 P-4 内上層に白磁碗小片（第39図-3）

③ SA-01（第38図）

規模 東西に4間（7.5m）または4間以上（東へ伸びる可能性）

ピット間寸法 西から1.9m～1.8m～2.0m～1.8m

ピット寸法 掘り方60～80cm、深さ50～70cm

出土遺物 なし

④ SA-02（第38図）

規模 東西に3間（5.8m）または3間以上（西へ伸びる可能性）

ピット間寸法 西から2.0m～1.9m～1.9m

ピット寸法 掘り方40～70cm、深さ50～90cm

出土遺物 P4内上層に染付磁器碗（第39図-6）と須恵器片、P5内上層に陶器碗（第39図-7）と染付磁器皿（第39図-8）

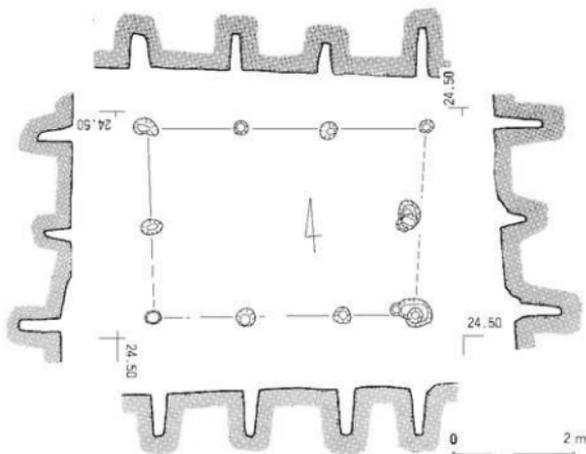
⑤ SA-03（第38図）

規模 東西に3間（6.0m）

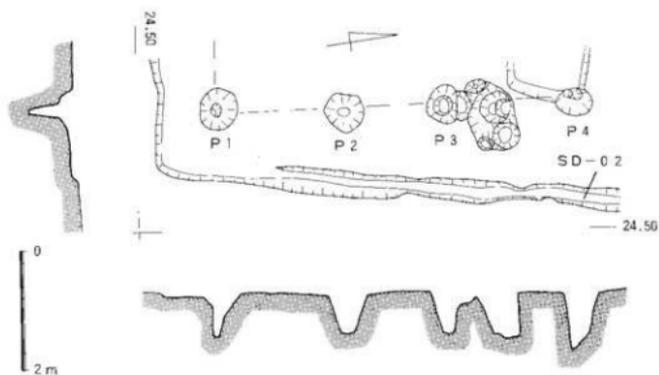
ピット間寸法 2.0m等間

ピット寸法 掘り方50～70cm、深さ60～90cm

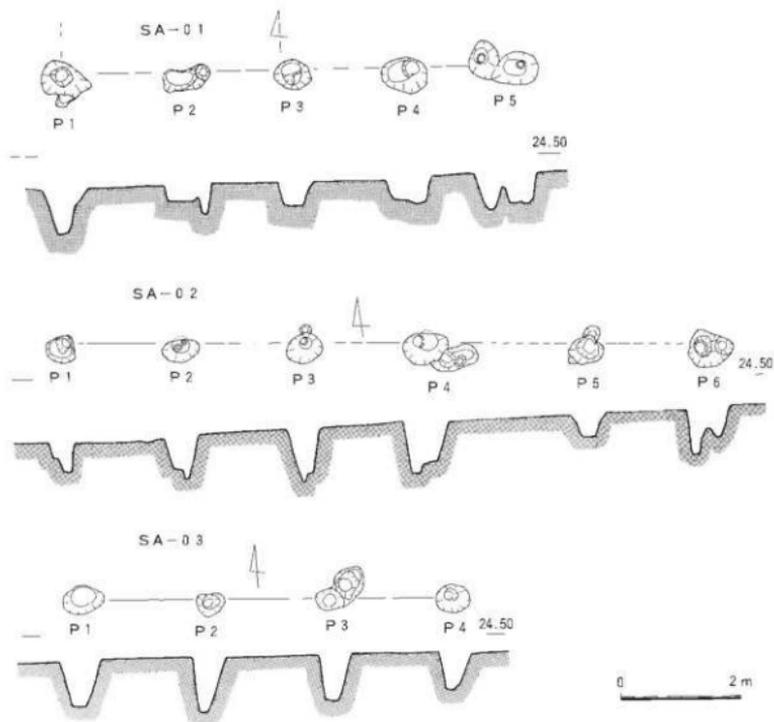
出土遺物 なし



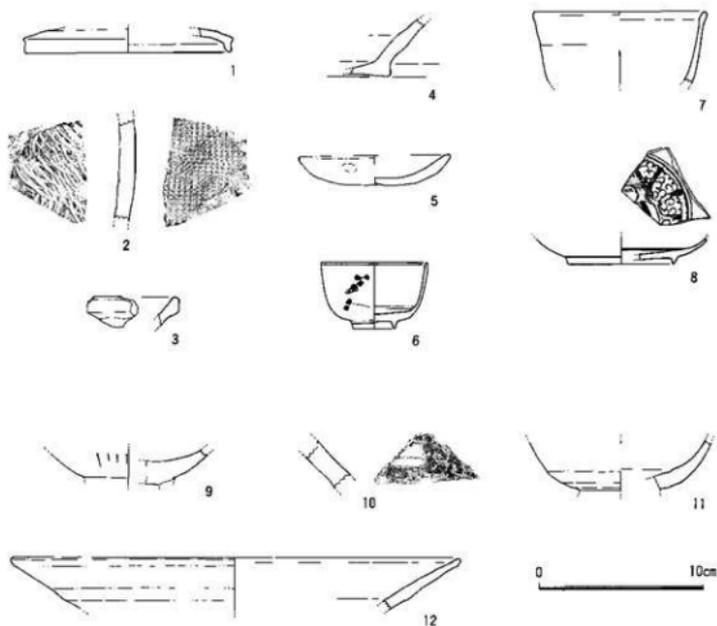
第36図 SB-01実測図



第37图 SB-02 实测图



第38图 SA-01~03 实测图



第39図 ビット中及びビット検出面出土遺物

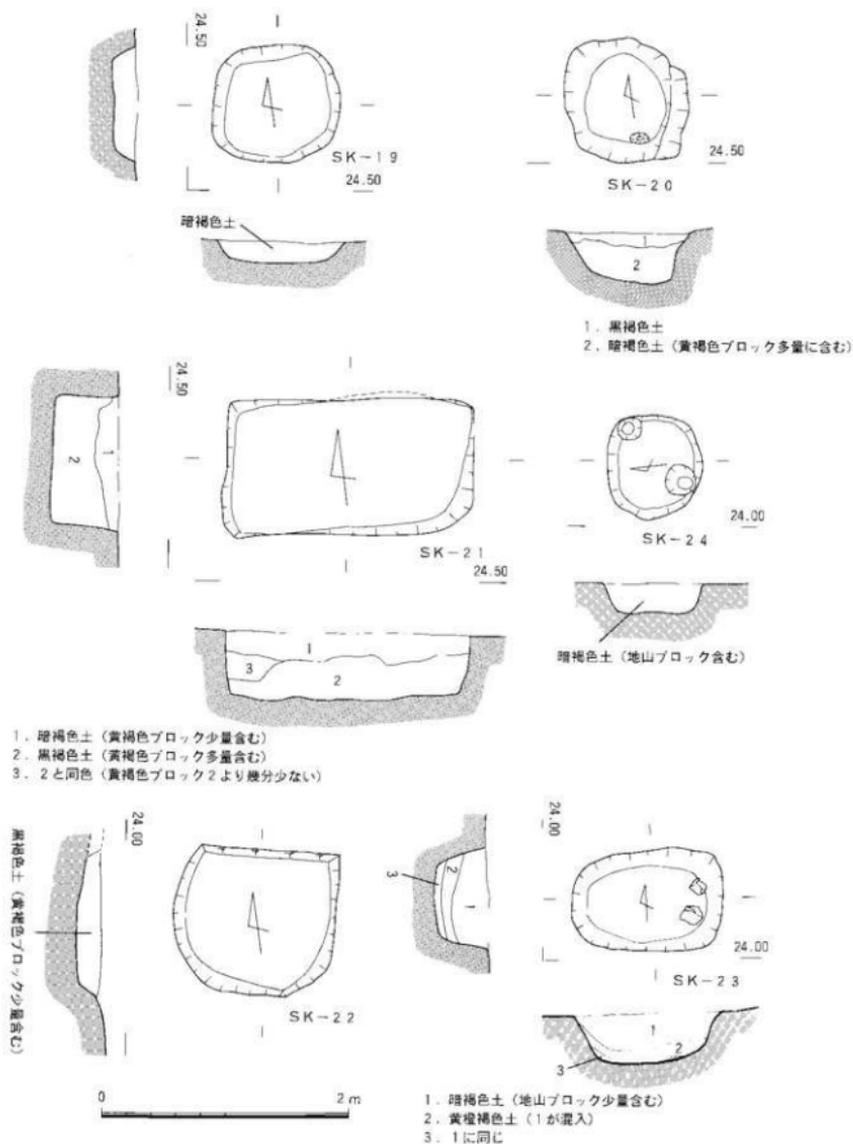
(2) ビット中及びビット検出面の出土遺物(第39図)(建物や櫛列以外のピットの位置は第4図を参照のこと)

1～8はビット中の出土遺物である。1、2はP22内出土の須恵器の坏蓋片と壺片である。3はSB-02のP4内出土の白磁碗の口縁部片で太宰府分類のN類に相当し、12世紀代のものである。4はP21内出土の土師質土器の坏底部と考えられるもの、5はP18内出土の土師質土器の皿で口径9.2cm、器高1.8cmのものである。6～8はSA-02のP4、5内出土のもので、6は口径6.4cm、器高4.1cmを測る中国産の青花磁器碗、7は口径10.4cmの唐津系の碗、8は中国産の青花磁器皿である。いずれも16世紀末頃と考えられる。図化していないが、以上の他にP23内出土の鉛釉をかけた唐津系碗、P26とP27内出土の焼締陶器壺片(常滑系)などがある。

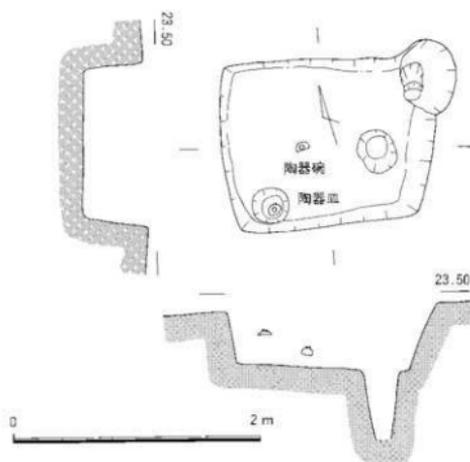
9～12はビット検出面の出土遺物である。9は線描き蓮弁文の龍泉窯系青磁碗で15世紀頃のもの、10は常滑碗の壺の肩部に押印をもつもの、11は唐津系の碗、12は唐津系の皿である。

(3) 土壌(第40図、第41図)

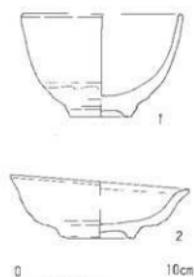
西調査区においては7基の土壌が検出された。詳細は下表の通りである。(番号は東調査区からの



第40図 SK-19~24 実測図



第41図 SK-25実測図



第42図 SK-25出土遺物

通し番号とした。)

表2 西調査区・その他の土坑一覧表

土坑番号	形態	法量 (m)	出土遺物	出土状況他
SK-19	隅丸方形	1.0×1.0×0.2	須恵器小片	埋土上層
SK-20	ややいびつな方形	1.0×1.0×0.4	なし	
SK-21	長方形	2.0×1.1×0.55	染付小片、 須恵器細片 土師器細片	埋土上層
SK-22	不整形	2.3×1.5×0.05~0.3	なし	
SK-23	隅丸長方形	1.2×0.8×0.4	陶磁器片、 須恵器小片	埋土上層
SK-24	隅丸方形	0.75×0.75×0.2	なし	
SK-25	長方形	1.7×1.4×0.5	唐津系碗、 皿	中～上層

(4) 土坑中の出土遺物(第42図)

摩滅した小破片が多く、同化したものはSK-25の遺物だけである。1は唐津系の碗で二日月高台のもの。口径10cm、器高6.4cmを測る。施釉部分は暗緑褐色である。2はやはり唐津系の縁反りの皿で口径11cm、器高3～4cmを測る。底部は露胎で施釉部分は淡い灰褐色である。いずれも16世紀末頃のものである。

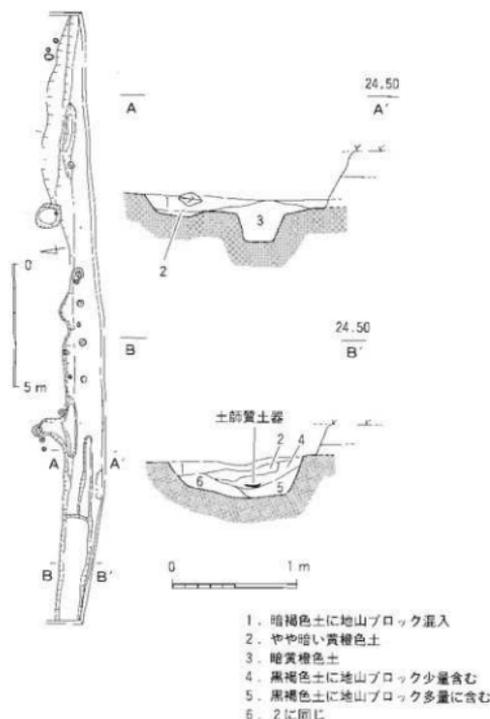
### (5) 溝状遺構

#### ①SD-01 (第43図)

調査区南端を東西に伸び、東調査区の西南端あたりから調査区からはずれていく。調査区内で確認した長さは27m、幅は約0.8m以上、深さは約20~30cmで西に向かって傾斜している。西寄りの部分は断面台形状に深くなっているが、東に行くにしたがってなだらかな傾斜に変わる。中程の一部がさらに深く30cmほど落ち込んでおり、西部近くから押印をもつ焼きしめ陶器の破片が出土した。遺物は他に陶器の碗、瓶、磁器片、土師質土器、須恵器などがある。

#### ②SD-02 (第37図)

SB-02を囲む様に回っているもので、この建物に伴うものと考えられる。南北方向は長さ5.7m以上あり、幅30~40cm、深さ7cm前後の浅いU字状をしている。出土遺物はなかった。



第43図 SD-01 実測図

### (6) 溝状遺構中の出土遺物 (第44図)

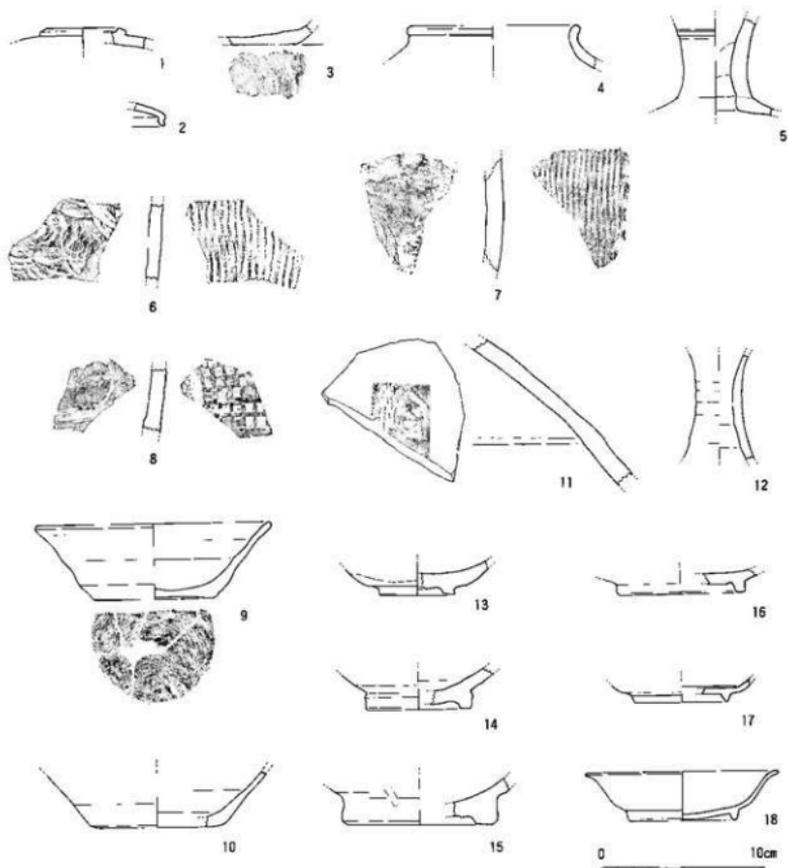
須恵器 (1~8) 1は輪状つまみの付く蓋、2は蓋の口縁端部で垂直に下がるもの、3は糸きり痕のある底部片、4は短頸壺の口縁部、5は長頸壺の頸部、6と7は葉片である。1~7は奈良時代頃のものと思われる。8は外面に格子タタキ痕のある中世須恵器片である。

土師質土器 (9、10) 9は口径14.2cm、器高4.6cmを測り、口縁が外反気味に大きく開く坏で、底部には回転糸きり痕がある。10は小片であるが、9と同様の坏と思われる。

焼締陶器 (11) 常滑系の甕の肩部で押印がある。

陶器 (12~16) 12~15は唐津系のものである。12は餗色の釉がかかる瓶、13は底部無釉の碗で釉は灰黄色、14も同様のもの、15は鉢の底部で緑灰色の釉がかかる。16は全釉の底部片で釉は淡緑色を呈する。底部外面には糸きり痕があり、付高台である。産地はわからない。

白磁 (17、18) 17は見込みの釉を輪状にかき取る皿である。白灰色の胎土に黒色の微粒を含み、底部外面は露胎で釉は黄色味を帯びた灰白色を呈す。産地は不明である。18は口径11.8cm、器高3cmを測る皿である。全面に灰白色の釉をかけ、疊付のみ釉をかき取る。16世紀代の中国産のもの。



第44図 SD-01出土遺物

- 註1 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970年  
 2 内田律雄「3. 鳥取県・島根県 『日本土器製塩研究』近藤義郎編 1994年  
 3 森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集4』九州歴史資料館 1978年  
 4 村上勇氏（広島県立美術館）のご教示による。

## IV. 遺構と遺物について

### 1. SK-10について

#### (1) 遺構の性格

SK-10は直径1m余り、深さ80cmほどの円形土壇でその埋土上層には須恵器11個と赤彩土師器1個が中央より東側に寄った位置に重ねて伏せられ、土器の上と土器から離れた場所の同じくらいの深さの所には手のひら大の石がそれぞれ1個と2個置かれていた。土器は重ねられたままで土壇の中央に向かって少し傾き加減となっている。出土土器の器種は須恵器の蓋2個、高台付坏4個、坏1個、高台付皿4個、土師器皿1個で構成されており、すべて供膳形態の土器である。石を乗せておさえ、土壇を封じたものかと思われ、何らかの祭祀に関連して埋納された土器群と考えられる。

#### (2) 出土須恵器について

11個の須恵器は胎土、焼成、色調、手法の特徴から大きく2群に分けられ、第1群は焼成の違いとそれに伴う色調の違いから2小群に分けられる。各群の特徴を簡単に表にすると

	番号	胎土	焼成	色調	手法
I-1群	1~5	1ミリ前後の砂粒多 (黒色粒子を含む)	良好、堅緻	灰色	回転ヘラ切り後ヘラ ケズリ又は回転ナデ
I-2群	6~9	1ミリ前後の砂粒多	やや不良~不良、軟質	灰白色	〃
II群	10	小砂粒を含む	良好	暗茶褐色	回転糸切り
	11	〃	〃	灰褐色	〃

I-1群とI-2群の違いは主に焼成の違いによるもので、I-1群が焼成不良になればI-2群になる可能性は人である。

I群土器は底部をヘラ切り後ヘラケズリ又は回転ナデするもので、その手法から大井以外の窯で焼かれたものと考えられる。これらは「多様な器種分化とその前提となる法量の規格性」という「律令的土器様式」<sup>(註1)</sup>の特徴をもつ土器群である。平城宮の土器編年を参考にして蓋の形態、坏の口縁の外傾度、高台の位置や形態などをみると、III~Vのうち、<sup>(註2)</sup>8世紀中頃~8世紀後半に併行すると考えられる。また北九州の編年をもとめると、<sup>(註3)</sup>やはり8世紀中頃~後半の時期に相当するのではないかと思われる。一方、II群の土器はその形態、胎土、焼成、色調、手法の特徴から大井の窯跡などで焼かれた在地の土器と考えられ、<sup>(註4)</sup>国庁編年の第4~5形式に相当し、8世紀後半から9世紀初頭に属すると考えられるのであるが、これらがI群の土器と共伴するということになれば当地方の8~9世紀の須恵器はかなりの見直しを必要とされてくるであろう。

#### (3) 墨書土器について

墨書土器(第29図6)は底部外面に墨の濃淡と大きさの違う墨書が二ヶ所になされるものである。

一つは濃い墨で小さく「云石」と書かれており、一方薄く大きい墨痕が高台内一面に見られる。<sup>(註5)</sup>「云石」の墨書の大きさは各文字が縦横1cmに満たないものであるが、このような比較的小さい楷書体の墨書は官衙関係のものに多く、九世紀以降の一般集落出土の墨書とは若干性格が異なることが指摘されている。<sup>(註6)</sup>

「云石」の墨書のうち「云」については、九世紀後半成立の漢和辞典である『新撰字鏡』によれば、「約束」の訓を「云佐豆久（いひさづく）」とし、「謬」の訓を「伊比阿也方互（いひあやまつ）」としているから、少なくとも九世紀後半頃には「云」は「伊比」に通じ、「いひ」と読まれていたものと考えられる。

さらに「伊比」については、天平元（733）年成立の『出雲国風土記』飯石郡条に郡名の由来について「所以号飯石者、飯石郷中伊毗志都幣命坐」とあり、この資料から八世紀段階に「飯」を「伊毗（比）」と表記したことが確認できる。先に述べたように九世紀後半には「伊毗（比）」は「云」であるから、結論として、「云石」は「飯石」の異なる表記である可能性が考えられる。

このような郡名の墨書は国府あるいは国府関連遺跡からの出土が見られ、その中には、下野国府跡（都賀郡内に位置）から出土した「塚屋」<sup>(註7)</sup>（下野国塩屋郡）の墨書土器、多賀城跡（陸奥国府。宮城郡内に位置）出土の「信夫」<sup>(註8)</sup>（陸奥国信夫郡）の墨書土器、多賀城跡寺（宮城郡内に位置）出土の「黒川」<sup>(註9)</sup>（陸奥国黒川郡）の墨書土器など、いずれも国府所在郡ではない国内の郡名を表記したのものが見られる。本遺跡は直接国府に関連するものではないが、はじめにふれたように「云石」の墨書はその小さく楷書体で書かれた特徴などから一般集落の墨書とは異なり、これら郡名を記した墨書土器との類似性を想定することができる。しかも、本遺跡は国府所在郡の意字郡内に位置していることから、上記の下野国府跡や陸奥国府である多賀城跡と同様に国内の郡名の墨書が存在する可能性は十分にあり、「云石」の墨書土器が「飯石」を表記したものと理解することができるであろう。

「飯石」に関連する資料としては、『出雲国風土記』に出雲国庁の所在した意字郡の内、山代郷には新造院が2ヶ所あり、その一つを飯石郡の少領出雲<sup>（註10）</sup>弟山が造立したという記事（「新造院一所、在山代郷中、郡家西北二里。建立飯堂。住僧一羣。飯石郡少領出雲<sup>（註10）</sup>弟山之所造也。」）が見え、注目される。この出雲<sup>（註10）</sup>弟山は後に（746年）出雲国造に任ぜられている。

いずれにせよ、このような郡名を記した可能性のある墨書土器が出雲国造の本質地とされる黒田峠の一角から発見されたということは、少なくとも近辺に官衙関連施設が飯石郡に關係のある官人層の館などの存在が想起され非常に興味深いものがある。

## 2. 土墳墓について

SX-01、02、04～06は形態や規模がよく似ており、しかも限られた範囲に一定の間隔を置いて掘り込まれた土墳である。その性格はSX-01、02における土師質土器、古銭、鉄釘という出土遺物の組み合わせからして土墳墓と考えられるものである。ただ03は他と比べて規模が小さく出土遺物もないが、同じように南北に長軸をもち近接して作られているので、小児墓と考えればよ

いではなかろうか。SX-01、02では鉄釘が木棺の大きさを示す状態で出土しており、01の95×45cmという数値からすると坐棺と考えられる。

SX-01から出土した六道銭は威元元寶（初鑄年998年）1枚、聖〇〇寶（聖宋元寶）（初鑄年1101年）1枚、不明3枚の計5枚であった。この枚数からすると中世墓の可能性が非常に高く、不明銭の中に寛永通寶の混じる可能性はほばないものと思われる。

SX-02から出土した六道銭は開元通寶（初鑄年621年）1枚、洪武通寶（初鑄年1368年）4枚、不明銭2枚、無文銭約90枚の計約100枚である。このうち無文銭については鳥根県下の報告例はないように思う。是光吉基氏によれば、無文銭の特徴は両面に郭部が存在しないことである。全国から出土した無文銭は同氏によって10型式に分類されているので、本遺跡から出土した無文銭をこれに従って分類すると、第34図7～17はB-I-1型（B：1.5～2.2cm程度の銭径のもの、I：郭穴が方形を呈するもの、1：郭穴と銭径の大きさの比較で郭穴が銭径の約3分の1程度のもの）、19はB-I-2型（2：銭径の約2分の1以上を郭穴が占めているもの）、18はB-III-2型（III：郭穴が隅丸方形をしているもの）、20、21はB-II-3型（II：郭穴が円形に近い形のもの、3：郭穴が極端に大きくて輪部に接する状態にあるもの）となるが、20、21は郭穴が極端に大きいというほどではないので、むしろB-II-2型として新たに設定した方がよいかもかもしれない。

図示した以外のものを含めた各型式の枚数はB-I-1型枚、B-I-2型枚、B-III-2型枚、B-II-3型枚でB-I-1型が大半を占める。近年の堺環濠都市遺跡の調査において、渡来銭・無文銭の銜型が16世紀中頃～後半の遺構や層位から出土しており、B-I-1型が圧倒的に多いと言われている。SX-02の出土銭は堺で出土した銜型で作られた無文銭の流通圏にあったものであろうか。

土師質土器については当地方における編年がいまだ確立しておらず、各土墳墓間の新旧について言及することはむずかしいが、類似品が荒隈城跡や阿田山1号墳の墳裾から出土しており、共伴の輸入陶磁器などから16世紀代のものとされているので、同様の時期と思われる。

各土墳間に切り合いはなく、一定の間隔を置いて同じ向きに作られているので、以前に作った場所が記憶に残るほどの期間に作られたものであろう。それは無文銭や土師質土器からみて、16世紀代を前後する時期と考えられる。

### 3. 建物跡について

建物跡や土壌、溝の中から出土した遺物のうち、須恵器・土師器は1～2cm大に細片化し、摩滅して時期のわかるものは数片であった。中世の土師質土器、焼締陶器、陶磁器などが目立ち、その下限は16世紀末頃である。

SB-01は柱穴の上層から須恵器の小片が出ている。（時期は不明。）南面する柱列はSD-01の底面から検出されているのでSD-01（16世紀末）より古い時期のものである。

SB-02は柱穴の上層から12世紀代の白磁碗の小片が出ている。SB-02と直交する形でSA

ー02が検出されたが、SA-02のピット内上層から16世紀末頃の陶磁器が出土しているので、これと切り合うSB-02は12世紀以降16世紀代までの間のものである。SA-01と03については出土遺物はないが、SA-02と平行して作られており同時期として差し支えないと考えられる。SA-01は調査区外の南北方向にも柱穴が伸びれば建物となる可能性が高い。

以上のように西調査区の建物跡は確実に古代のものとは断定できるものではなく、むしろ中世から戦国末期を中心としたものと考えられる。

註1 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』昭和51年

- 2 註1及び西 弘海『土器様式の成立とその背景』西 弘海遺稿集刊行会編 昭和61年
- 3 舟山良一「牛頭塚群と太宰府」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東2 須恵器—』古代の土器研究会シンポジウム 1993年
- 4 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970年
- 5 底部外面に墨の濃淡と文字の大きさを覚えて記載する墨書土器は群馬県前山Ⅱ遺跡（山武考古学研究所『群馬県前橋市 前山Ⅱ遺跡 発掘調査報告書』1990年）から出土しており、薄く大きな文字で「車」、濃く小さな文字で「東院」と墨書されるものである。）
- 6 平川南・犬野努・黒田正典「古代集落と墨書土器」『国立歴史民俗博物館研究報告22』1989年
- 7 栃木県教育委員会『下野国府跡Ⅴ』1983年
- 8 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991 多賀城跡』1992年
- 9 宮城県教育委員会・多賀城町「多賀城跡調査報告Ⅰ 多賀城廃寺」
- 10 是光吉基「国内出土のいわゆる無文銭について」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』1993年
- 11 嶋谷和彦「堺出土の銭鋳型と中世後期の模鋳銭生産」『中世の出土銭』1994年
- 12 松江市教育委員会「荒隈城跡」1982年
- 13 鳥取県教育委員会『出雲岡田山古墳』昭和62年

## V. まとめにかえて

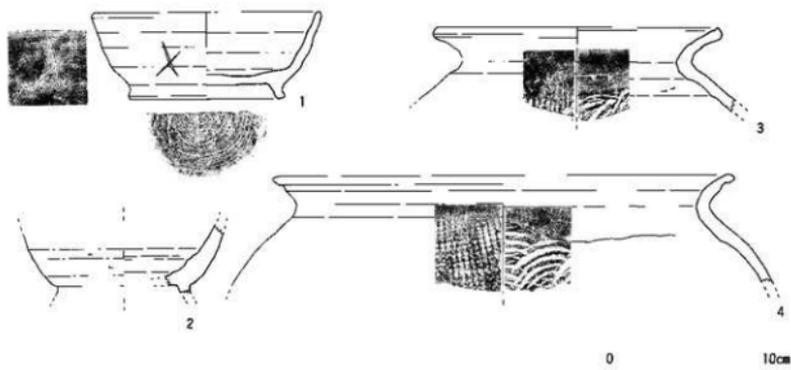
黒田畦遺跡では奈良時代の塵埃や不用十器を廃棄した土壌、祭祀に関わると考えられる土器埋納土壌、中世墓、中世～戦国末期頃の建物や棚列、土塼、溝などが発見され多くの遺物が出土した。

奈良時代の十器廃棄場から供膳具を中心とした多量の須恵器や赤彩土師器、焼塩用の製塩土器片などが出土したことから、公的な施設（官衙関係）の一括廃棄物であることが推測され、又土器埋納場の一括十器の中に「云石」（＝「飯石」か）と墨書された律令様式の須恵器皿があったことから、益々近辺に官衙関連施設や官人層の館跡などの存在した可能性が高くなった。

土器埋納土塼（SK-10）の一括資料は律令様式の土器と在地の土器の併行関係がわかる良好なものであり、8世紀中～後半の標識資料になると考えられる。

第45図は調査区の東15～20m地点の畑の中で表土下約1mのところから岡田茂氏によって採集された須恵器である。他に赤彩土師器片もまじっており、土器廃棄場の遺物と同時期頃のものと思われる。本遺跡周辺ではこれ以外にも奈良時代の須恵器、土師器が表採されて周知の遺跡となっており、今回調査した区域は周知の黒田畦遺跡のごく一部にすぎない。

また中世～戦国末期頃の建物跡や溝からは12～16世紀末頃の輸入陶磁器が少量ではあるが出土していることから、国造家の宿館の周辺部にはかなり有力な階層の屋敷跡が黒田館以外にも存在したことがわかってきたといえよう。なおこれらの建物と同時期ごろの土塼墓からは多量の無文銭が出土しているが、県内では初めての事例であり注目される。



第45図 岡田茂氏採集土器

遺物観察表(1)

部図番号	種類	器種	出土地点	法 蓋	形態・手法の特徴	備 考
第13図1	須恵器	蓋	SK01	口 径 14.8 器 高 1.95	輪状つまみ、口縁端部は垂下	
2	"	蓋	"	つまみ径5.0	輪状つまみ	
3	"	杯	"	口 径 13.2 器 高 4.5	口縁端部はわずかにくびれる 底部回転糸切り	
4	"	高台付杯	"	口 径 14.0 器 高 4.5	底部回転糸切り後、軽いナゲ	
5	"	鉄鉢形	"	口 径 15.2 器 高 7.7	口縁部内側、底部回転ヘラケズリ	
6	"	?	"	口 径 14.5	脚又は台が付く器形のもの	
7	"	壺頸部	"		沈線一条	
8	上器器	杯	"		赤色塗彩、回転糸切り	胎土は精選されている
9	"	杯	"	口 径 14.8 器 高 3.1	赤色塗彩、口縁部わずかに外反 回転糸切り	"
10	"	底 部	"	底 径 10.6	赤色塗彩、磨減	小砂粒を若干含む
11	"	底 部	"	底 径 13.2	赤色塗彩、回転糸切り	胎土精良
12	"	底 部	"		赤色塗彩、回転糸切り痕あり	"
13	"	皿	"		赤色塗彩、内外面共回転ナゲ	
14	"	土製支脚	"	底 径 11.0	底部、ヘラケズリ	
第14図1	須恵器	蓋	SK02下層	口 径 12.6	つまみ欠損、口縁端部三角状	
2	"	蓋	"	口 径 19.2 器 高 4.8	宝珠状つまみ、天井部平担 口縁端部三角状	
3	"	蓋	"	口 径 10.6	つまみ欠損、天井部に停止糸切り痕 口縁端部三角状	
4	"	杯	"	口 径 11.8 器 高 4.4	口縁部にくびれあり、底部回転糸切り	
5	"	杯	"	口 径 12.3 器 高 4.3	"	
6	"	杯	"	口 径 11.8 器 高 4.2	"	
7	"	杯	"	口 径 9.2 器 高 3.1	口縁部内側後外傾、底部回転糸切り	
8	"	皿	"	口 径 15.0 器 高 2.6	口縁部外反、底部回転糸切り	
9	"	高台付杯	"	口 径 9.6 器 高 3.8	口縁部は底端より外傾して伸びる 底部糸切り	
10	"	高台付杯	"	口 径 8.6 器 高 3.9	口縁は底端近くより外傾 底部回転糸切り	
11	上器器	高台付杯	"	口 径 11.8 器 高 4.65	口縁は底端近くより外傾 底部回転糸切り	口縁端部に標明の 油痕
12	須恵器	杯	"	口 径 19.2 器 高 9.6 高台 径 12.2	口縁部外反、高台は内端で接地 底部回転ヘラ切りか	

遺物観察表(2)

標記番号	種類	器種	出土地点	法	蓋	形態・手法の特徴	備考
第14図13	須恵器	高環	SK02底面	底	径 13.6	胴端部は短く直立、 環体部外面回転ヘラケズリ	
14	"	高環	SK02F層	口	径 21.6	口縁端部は短く直立し三角状	
15	"	高環	"	口	径 16.8	"	
16	"	高環	"	口	径 27.4	口縁端部は丸い	
17	"	鉢	"	口	径 19.0	口縁端部は器出、胴部に發	
18	土器器	甕	"	口	径 17.8	口縁部外湾、内面頰部以下ヘラケズリ	
19	"	甕	"	口	径 20.6	外面ヘケ目、内面ヘラケズリ	
20	"	土製支脚	"			頂部に三稜をつくる、ヘラケズリ	
第15図1	須恵器	蓋	SK02上層	口	径 14.9 器高 3.4	宝珠状つまみ、天井部平坦	
2	"	蓋	"	口	径 13.4 器高 3.3	"	
3	"	蓋	"	口	径 15.6	つまみ欠損 天井部回転ヘラケズリ	
4	"	蓋	"	口	径 13.4 器高 3.2	宝珠状つまみ	
5	"	蓋	"	口	径 13.4	宝珠状つまみ 天井部に静止糸切り痕	
6	"	蓋	"	口	径 14.0 器高 3.7	宝珠状つまみ	
7	"	蓋	"	口	径 15.6	口縁端部三角状	
8	"	蓋	"	口	径 12.0	つまみ欠損 三角状の口縁端部	外面に火だすき
9	"	蓋	"	口	径 13.4	つまみ欠損	
10	"	蓋	"	口	径 13.8 器高 3.4	宝珠状つまみ、天井部平坦	
11	"	蓋	"	口	径 12.8	つまみ欠損、天井部に糸切り痕	
12	"	蓋	"	口	径 10.2	"	
13	"	蓋	"	口	径 11.3 器高 2.8	宝珠状つまみ、天井部平坦	
14	"	蓋	"	口	径 9.4	つまみ欠損、口縁端部垂下	
15	"	環	"	口	径 15.0 器高 6.0	口縁部にくびれあり 底面回転糸切り	
16	"	環	SK02上層	口	径 11.4 器高 4.0	"	
17	"	環	"	口	径 13.0 器高 3.7	"	
18	"	環	"	口	径 12.2 器高 4.6	口縁外面のみややくびれる 回転糸切り	
19	"	環	"	口	径 12.0 器高 3.3	口縁部にくびれあり浅い 底面回転糸切り	
20	"	環	"	口	径 14.0	口縁端部内側に肥厚、回転糸切り	
21	"	環	"	口	径 12.4 器高 3.8	口縁外面にくびれあり、回転糸切り	

遺物観察表(3)

採出番号	種類	器種	出土地点	法 量	形態・手法の特徴	備 考
第15図22	須臾器	杯	SK021:層	口径 11.5 器高 4.7	口縁部にくびれの痕跡、糸切り痕あり	
23	"	杯	"	口径 12.2 器高 4.4	回転糸切り痕	
24	"	杯	"	口径 11.5 器高 3.5	口縁部は内湾後直立、回転糸切り	
25	"	杯	"	口径 11.6 器高 4.0	"	
26	"	杯	"	口径 13.2 器高 3.8~3.9	"	
27	"	杯	"	口径 12.3 器高 3.3	口縁部は内湾気味に外傾、回転糸切り	
28	"	杯	"	口径 14.6 器高 3.7	口縁部は内湾後直立、静止糸切り	
29	"	高台付杯	"	口径 9.2	高台は底端よりやや内よりに付く 回転糸切り	
30	"	高台付杯	"	口径 11.4 器高 4.0	高台の底端に付く、口縁部外反静止 糸切り	
31	"	高台付杯	"	口径 12.3 器高 4.4	高台の底端に付く、口縁部外傾回転 糸切り	底部外面にラセン状 のヘラ記号
32	"	高台付杯	"	口径 12.0 器高 3.6	"	
第16図1	"	皿	"	口径 13.0 器高 2.7	口縁部外反気味、回転糸切り	
2	"	皿	"	口径 14.6 器高 2.4	"	
3	"	皿	"	口径 14.9 器高 2.3	"	
4	"	皿	"	口径 13.8 器高 2.5	口縁部内湾後外傾、静止糸切り	
5	"	皿	"	口径 15.4 器高 2.2	口縁部内湾後外傾、回転糸切り	
6	"	皿	"	口径 14.2 器高 2.3	口縁部内湾後外反気味、回転糸切り	
7	"	高台付皿	"	口径 18.2 器高 4.0	高台は底端より中央寄りに付く 底外面回転ナデ	
8	"	高台付皿	"	口径 19.4 器高 3.8	高台は底端より内側に付く、回転糸 切り	
9	"	高台付皿	"	口径 17.8 器高 3.8	"	
10	"	高台付皿	"	口径 18.4 器高 3.1	"	
11	"	高台付皿	"	口径 19.4 器高 3.85	焼成不良により磨減	

遺物観察表(4)

挿入番号	種類	器種	出土地点	法	量	形態・手法の特徴	備考
第16図12	須恵器	高台付皿	SK02上層	口 器	径 16.6 高 3.9	高台は底端よりやや内側、回転糸切り	
13	"	高台付皿	"	口 器	径 20.0 高 4.2	高台は底端よりやや内側に付く	
14	"	高台付皿	"	口 器	径 16.8 高 3.6	高台は底端よりやや内側に付く 口縁部外反、静止糸切り	
15	"	高台付皿	"	口 器	径 15.6 高 3.6	高台は底端付近に付く、口縁端部内 面に沈線、磨減して調整不明	
16	"	高台付皿	"	口 器	径 18.3 高 3.5	高台は底端付近に付く、口縁端部内 面に沈線、回転糸切り	
17	"	高台付皿	"	口 器	径 17.8 高 2.9	高台はつまみ出して作る、口縁端部 内面に沈線、回転糸切り	
18	"	高台付皿	"	口 器	径 16.6 高 2.8	高台は底端付近に付く、口縁部外反 底面回転ヘラケズリ	
19	"	高台付皿	"	底	径 14.4	底外面は回転ヘラケズリか	
20	土師器	高台付皿	"	口 器	径 18.5 高 3.7	赤色塗彩、回転糸切り、胎土精良	
21	須恵器	高台付皿	"	口 器	径 26.6 高 3.6	口縁部内筒後直立、高台は中央寄り 糸切り痕あり	
22	"	高台付小皿	"	口 器	径 8.7 高 2.0	高台は底端に付く、口縁端部内面に 沈線、底外面回転ヘラケズリ	
第17図1	"	高 杯	"	口 器	径 15.4	杯部片、口縁部は浅いが、丸みを帯 びる	
2	土師器	高 杯	"	口 器	径 17.2	浅い杯部、赤彩の可能性、胎土は砂 粒を多く含む粗	
3	須恵器	高 杯	"	底	径 9.6	脚端部は三角状	
4	"	高 杯	"	口 器	径 16.8 高 10.7	杯部は浅い、口縁端、脚端部三角状	
5	"	高 杯	"			脚部部片	
6	"	高 杯	"	口 器	径 27.0	浅い杯部、口縁端部は丸い、外面 ヘラケズリ	
7	"	高 杯	"	口 器	径 21.8	浅い杯部、口縁端部は三角状に直立 外面ヘラケズリあり	
8	"	高 杯	"	口 器	径 23.0	"	
9	"	高 杯	"	口 器	径 25.8	"	
10	"	高 杯	"	口 器	径 26.2	浅い杯部、口縁端部は屈曲して 直立する、回転ヘラケズリ	瓦質の焼き
11	"	高 杯	"	口 器	径 28.2	焼成不良により磨減して調整不明	
12	"	短頸壺	"	口 器	径 8.3 高 7.2	胴部下半クロ目顯著、回転糸切り	
13	"	壺	"			丸底、底～体部回転ヘラケズリ	
14	"	壺	"	口 器	径 12.6 残存高 11.4	葉壺形、平行印き後回転ナデ	

遺物観察表(5)

採回番号	種類	器種	出土地点	法 量	形態・手法の特徴	備 考
第17回15	須恵器	鉢	SK02上層	口 径 20.8	口縁端部「く」の字に屈曲	
第18回1	"	甕	"	口 径 20.0	外面平行叩き、内面青銅波叩き	
2	"	甕	・SK02下層 (II段部) ・SK06 (底部)	口 径 13.0 器 高 44.6	"	
3	"	甕	SK02上層		"	
4	土師器	底 部	"		赤彩、底部周縁回転ヘラケズリ	
5	"	甕	"	口 径 20.0	ヨコナダ、内面頰部以下ヘラケズリ	
第19回1	製塩器	口 縁 部	SK02下層		外面に指頭片痕、器壁が割離	
2	"	口 縁 部	SK02上層		指頭片痕、器壁磨耗割離、淡赤色	
3	"	II 縁 部	SK02		内外に指頭片痕、ひびわれが黒変	
4	"	口 縁 部	SK02下層		外面指頭片痕、ナデ	
5	"	口 縁 部	SK04		磨耗	
6	"	II 縁 部	第1区3層～ 第4層上面		内面強いナデ、器表は荒れている	
7	"	胴 部	SK02		外面ひびわれ、内面横方向に強くなでる	
8	"	II 縁 部	SK02上層		内外面指頭片痕とナデ、器壁割離	
9	"	口 縁 部	SK02下層		指頭片痕、一部ひびわれ	
10	"	口 縁 部	SK07		器壁磨耗割離	
11	"	II 縁 部	SK02上層		指頭片痕とナデ	
12	"	口 縁 部	I区第3層		口縁端部に半平面、内面に一部布目が残る	
13	"	II 縁 部	SK02上層		磨耗	
14	"	II 縁 部	SK07		磨耗	
第20回1	"	口 縁 部	SK04 SK02上層	口 径 12.1	口縁端部は水平にカット、内面に布目	
2	"	II 縁 部	SK02下層		端部は水平にカット、外面指頭片痕 内面布目	
3	"	II 縁 部	SK02		口縁端部にひび割れ、外面指頭片痕 内面布目痕	
4	"	II 縁 部	SK02上層		外面指頭片痕、ひび割れ 内面布目痕、一部赤変	
5	"	II 縁 部	SK02		外面指頭片痕、内面布目痕 黄褐色～淡赤褐色	
6	"	口 縁 部	SK02上層		外面ナデ、内面布目痕	
7	"	II 縁 部	SK02上層		外面指頭片痕、内面布目痕	
8	"	II 縁 部	SK02		外面指頭片痕、内面布目、一部赤変	
9	"	口 縁 部	SK02上層		外面指頭片痕、内面布目痕	
10	"	胴 部	SK02		外面ナデ、内面布目痕	
11	"	胴 部	"		外面指頭片痕、内面布目痕	
12	"	胴 部	SK02上層		"	
13	"	胴 部	"		外面磨耗、内面布目痕	

遺物観察表(6)

採回番号	種類	器種	出土地点	法量	形態・手法の特徴	備考
第20回14	製塩土器	削部	SK02		外面ナデ、内面布目痕	
15	"	削部	SK02上層		外面滑注痕、内面布目痕、一部赤変	
16	"	胴部	"		外面ナデか、内面布目痕	
第21回1	須恵器	蓋	SK04上	□ 径 14.8 器 高 2.1	低い宝珠状つまみ □縁部は垂下	
2	"	蓋	"	□ 径 15.2 器 高 3.3	宝珠状つまみ、□縁部は三角状	
3	"	杯	SK04内	□ 径 12.8 器 高 5.1	口縁部はくびれる、丸底、回転系切り	
4	"	杯	"	□ 径 12.6 器 高 4.8	"	
5	"	杯	"	□ 径 13.4 器 高 4.6	口縁部はくびれる、平底、回転系切り	
6	"	杯	"	□ 径 12.6 器 高 4.3	□縁部はくびれる、上げ底 回転系切り	
7	"	杯	"	□ 径 13.1 器 高 4.0	口縁部はわずかにくびれる、平底 回転系切り	
8	"	杯	"	□ 径 13.6 器 高 4.0	"	
9	"	杯	"	□ 径 13.0 器 高 4.2	"	
10	"	杯	"	□ 径 14.6 器 高 4.8	□縁部は丸みを帯びた体部から外 上方にのびる、回転系切り	
11	"	杯	"	□ 径 13.4 器 高 3.4	□縁部外傾、平底、回転系切り	
12	"	高台付杯	SK04上	□ 径 12.2 器 高 3.5	□縁部は内湾気味に伸びる 回転系切り	
13	"	高台付杯	"	□ 径 9.6 器 高 3.45	"	
14	"	鉢	SK04内	□ 径 16.6 器 高 7.1	鉄鉢形、底へ体部回転ヘラケズリ 系切り痕あり	
第22回1	"	皿	"	□ 径 16.6 器 高 3.0	□縁内湾気味に伸びる、回転系切り	
2	"	皿	"	□ 径 17.6 器 高 2.5	"	
3	"	皿	SK04上	□ 径 16.0 器 高 2.8	"	
4	"	皿	SK04内	□ 径 14.0 器 高 2.25	"	
5	"	短頸壺	"	□ 径 10.6 器 高 4.3	□縁は短く外反	
6	"	長頸壺	"	胴部 最大径 16.6	胴曲する肩部	
7	"	甕	"	□ 径 23.6 器 高 14.8	□縁「く」の字に胴曲、把手と高台付 印き成形、丸底	

遺物観察表(7)

採図番号	種類	器種	出土地点	法量	形態・手法の特徴	備考
第22図 8	須恵器	甕	SK04内	口径 48.0 器高 15.8	大形の甕、把子付叩き成形	
9	"	把手	"			
第24図 1	"	甕	"	口径 22.2	口縁外面に「卍」のヘラ記号、叩き成形	
2	"	横瓶	"	口径 10.8	叩き成形	
3	土師器	甕	SK04内 SK07上	口径 16.8	外面ハケ目、内面ヘラケズリ	
4	"	甕	SK04内	口径 16.2	"	
5	"	甕	"	口径 23.0	"	
6	須恵器	蓋	SK04隣接土壌	口径 12.6 器高 3.7	宝珠状つまみ、蓋の高か	
7	"	高台付皿	"	口径 18.6 器高 2.9	焼成不良により磨減	
8	土師器	甕	"	口径 30.0	外面ハケ目、内面ヘラケズリ 口縁部内面に「十」のヘラ記号	
第23図 1	"	坏	SK04	口径 13.1 器高 3.35	赤色塗彩、口縁外傾、回転糸切り	
2	"	坏	"	口径 14.6 器高 4.4	赤色塗彩、体部は丸味をもつ 回転糸切り	
3	"	坏	"	口径 14.0 器高 3.3	赤色塗彩、口縁部外反気味 回転糸切り	
4	"	坏	"	口径 16.0 器高 2.9	赤色塗彩、口縁端部外反、回転糸切り	
5	"	坏	"	口径 15.6 器高 3.8	"	
6	"	底部	"	底径 10.4	赤色塗彩、回転糸切り	
7	"	皿	"	口径 15.2 器高 2.5	赤色塗彩、口縁内湾気味に伸びる 回転糸切り	
8	"	皿	"	口径 16.0 器高 2.0	"	
9	"	高台付皿	SK04内	口径 25.6 器高 3.2	赤色塗彩、内外面ヘラミガキ 静止糸切り	
10	"	高台付皿	"	底径 19.8	赤色塗彩、内底面の一部ヘラミガキ 静止糸切り後ナデ	
11	"	高台付皿	SK04	底径 15.8	赤色塗彩、内外面ヘラミガキ	
12	"	高台付皿	SK04内	口径 20.8 器高 3.3	赤色塗彩、底部に糸切り痕	
13	"	高台付皿	SK04	底径 15.8	赤色塗彩、回転糸切り	
14	"	高台付皿	"	口径 24.4 器高 3.3 底径 18.8	赤色塗彩、回転糸切りか、磨減	
15	"	坏	SK04内	口径 18.2 器高 5.3	赤色塗彩、口縁内湾、回転糸切り	
16	"	鉢	"	口径 18.2 器高 6.4	赤色塗彩、半球形 外面下半手持ちヘラケズリ、内面ナデ	

遺物観察表(8)

挿図番号	種類	器種	出土地点	法量	形態・手法の特徴		備考
第23図17	土器器	鉢	SK04内	口径 18.2	赤色塗彩、口縁端部外反、磨減		
第25図1	須恵器	蓋	SK05	つまみ径 5.4	輪状つまみ		
2	"	蓋	"	口径 14.0	口縁端部垂下		
3	"	蓋	"	口径 16.2	"		
4	"	高台付杯	"	口径 12.4 器高 4.7	体へ口縁は丸味あり、糸切り後ナゲカ		
5	"	甕	"		簡略な波状文2段		
6	土器器	杯	"	口径 14.1 器高 4.6	赤色塗彩、口縁外反丸味 底端回転ヘラケズリ		
第26図1	須恵器	蓋	SK06	口径 20.0	つまみ欠損、天井部平ら 口縁端部三角状		
2	"	蓋	"	口径 13.0	"		
3	"	杯	"	口径 12.6 器高 4.3	口縁部わずかにくびれる、回転糸切り		
4	"	杯	SK06上	口径 12.4 器高 3.9	"		
5	"	杯	"	口径 13.8 器高 4.1	"		
6	"	杯	SK06	口径 12.4 器高 4.1	"		
7	"	杯	"	口径 12.8 器高 4.35	口縁部内湾丸味、回転糸切り		
8	"	高台付皿	"	口径 19.6 器高 3.3	高台は底端近くに付く、回転糸切り		
9	"	片口鉢	SK06上	口径 22.6	注ぎ口あり		
10	"	高杯	SK06	口径 25.4	口縁端部内面に小さな段 杯部外面回転ヘラケズリ		
11	"	甕	SK06上		叩き成形		
第27図1	"	蓋	SK07上	口径 12.2	つまみ欠損、天井部平ら 口縁端部三角状		
2	"	杯	"	口径 12.3 器高 4.2	口縁部内湾、回転糸切り		
3	"		"	口径 20.2 器高 5.1	高台は底端中央よりに付く 器底厚く重い		
4	土器器	高台付杯	"	口径 13.1 器高 4.0	赤色塗彩		
5	"	高杯?	"	口径 24.6	赤色塗彩、口縁端部に平らな面 外面ヘラミガキか、内面磨減		
6	"	甕	"	口径 31.6	外面ヘケ目、内面ヘラケズリ		
7	"	甕	"	口径 35.6	外面磨減、内面ヘラケズリ		
写真図版	須恵器	高台付皿	SK03	底径 19.8	高台は底端近くに付く、静止糸切りか		
	"	高台付皿	"	底径 19.2	"		
第28図1	"	蓋	SK09	口径 16.5	つまみ欠損、低い天井部に糸切り痕 口縁端部三角状		

遺物観察表(9)

採出番号	種類	器種	出土地点	法量	形態・手法の特徴	備考
第28回	須恵器		SK09	口径 17.4	つまみ欠損、天井部平ら 口縁端部小さい三角状	
3	"	高台杯	"		杯部外面回転ヘラケズリ	
4	"	高台杯	"		杯部に5mm大の内孔あり 焼成不良で乳白色	
5	"	壺	"	口径 14.8	壺等の口縁か	
第29回	1	"	SK10	口径 13.2 器高 2.6	貝状の扁平つまみ、口縁端部短く重ど 天井部をていねいに回転ヘラケズリ	黄緑色の自然釉、胎 土に黒色粒を含む。
2	"	蓋	"	口径 15.6 器高 2.6	"	"
3	"	高台付杯	"	口径 11.6 器高 4.4	高台は底端近くに付く 体～底部をていねいに回転ヘラケズリ	胎土に黒色粒を含む
4	"	高台付杯	"	口径 11.6 器高 4.5	"	"
5	"	高台付杯	"	口径 14.2 器高 5.0	高台は底端近くに付く、中央にヘラ切り 痕、体～底部をていねいに回転ヘラケズリ	"
6	"	高台付皿	"	口径 13.1 器高 2.85	高台は底端近くに付く 底部回転ヘラ切り後底面ナデか	石灰石の帯書
7	"	高台付皿	"	口径 13.0 器高 2.75	"	1mm大の砂粒多
8	"	高台付皿	"	口径 13.4 器高 2.3	高台は底端近くに付く 底部回転ヘラケズリ	"
9	"	高台付皿	"	口径 19.0 器高 3.05	"	黒色粒を含む 火だすき
10	"	杯	"	口径 10.8 器高 4.1	口縁部はわずかにびれる 回転糸切り	
11	"	高台付杯	"	口径 12.6 器高 5.05	口縁部外縁、端部外面に洗線 回転糸切り、「メ」のヘラ記号あり	
12	土師器	皿	"	口径 14.7 器高 2.4	赤色塗彩、体～底部手持ちヘラケズリ 胎土精良	
写真4版	須恵器	高台付皿	SK11	口径 20.4 器高 3.5	高台は底端付近に付く、回転糸切り	
	"	高台杯	"	口径 23.2 器高 9.8	浅い杯部、ロゴ目顯著	
	"	高台杯	"	口径 28.8	浅い杯部、軟質の焼成	
第30回	1	"	SK12		宝珠状つまみ、天井部平ら	
2	"	高台付杯	"	口径 9.0	「ハ」の字に開く高台	
3	"	高台付皿	"	口径 18.4 器高 4.0	口縁部外反気味、回転糸切り 高台は底端寄りに付く	
4	"	高台付皿	"	口径 20.0 器高 4.4 底径 14.0	口縁部外縁、回転糸切り 高台は底端より内側に付く	
5	"	高台付皿	"	口径 20.6 器高 3.95	口縁部外縁、回転糸切り 高台は底端よりやや内側に付く	

遺物観察表 (10)

図号番号	種類	器種	出土地点	法 量	形態・手法の特徴	備 考
第30図	須 忍 器	高台付皿	SK12	口 径 17.2 器 高 3.9	口縁部外傾、回転糸切り 高台は底端よりやや内側に付く	
		高台付皿	"	口 径 22.8 器 高 3.45	高台は底端に付く、磨減	
	"	皿	"	口 径 13.9 器 高 1.95	口縁外傾、回転糸切り	
	"	高 杯	"	底 径 10.4	脚部	
	"	高 杯	"	底 径 13.0	脚部	
	"	高 杯	"	底 径 17.6	脚部大きく開く	
	"	帯	"	口 径 6.4	口縁部、外面に沈線状の段あり	
	"	甕	"		胴部の小片、叩き成形	
	写真図版	"	甕	"	胴部片、外面平行印き、内面青濁波印き	
	"	"	甕	"	胴部片、外面平行印き、内面青濁波印き	
		土 器	製支脚	"	頂部に三枝をつくる、ヘラケズリ	
	第35図	上部質土器	皿	SX01	口 径 8.8 器 高 2.0	ナデ
皿			"	口 径 11.4 器 高 2.6	外面指頭圧痕、内底面「J」の字状のナデ上げ	
皿			"	口 径 11.4 器 高 2.4	口縁部ヨコナデ、内底面「I」の字状のナデ上げ	
皿			"	口 径 11.4 器 高 2.4	口縁部ヨコナデ、地はナデ	
皿			SX02	口 径 11.4 器 高 2.5	口縁部ヨコナデ、回転糸切り	
皿			SX04	口 径 11.7 器 高 2.5	外面指頭圧痕、粘土の織き目？ 内面「J」の字状のナデ上げ	
皿			"	口 径 12.2 器 高 2.2	外面指頭圧痕、内面「J」の字状のナデ	
皿			SX05 上面	口 径 12.3 器 高 2.3	口縁部ヨコナデ、体へ底部指頭圧痕	
皿			SX05	口 径 12.2 器 高 2.4	磨減、内底面「J」の字状のナデ上げ	
皿			SX06	口 径 10.5 器 高 2.2	底部回転糸切りか、磨減	
皿			"	口 径 10.2 器 高 2.35	底部回転糸切り	
第39図	須 忍 器	蓋	P-22	口 径 12.6	口縁部の小片、端部は平下	
		蓋	"		胴部片、叩き成形	
	磁 器	碗	SB04、P4		口縁を大きめの土層につくる	白磁碗B型
	上部質土器	杯?	P-21		底部は回転糸切りか	
	"	皿	P-18	口 径 9.2 器 高 1.8	磨減	
	磁 器	碗	SA02、P4 上	口 径 6.4 器 高 4.1	高台は直立して細く、盃付の前をかきとる 外面に小花の文様、青紫を帯びた白色を呈す	中国製(16C末)

### 遺物観察表 (II)

挿入番号	種類	器種	出土地点	法量	形態・手法の特徴	備考
第39図7	陶器	碗	SA02、P5	口径 10.4	釉調は淡褐色	唐津系
8	磁器	皿	"	底径 6.4	内底面に文様、高台は小さな二角状	中国製(16C末)
9	青磁	碗	黒褐色土		線描き蓮弁文	中国製
10	陶器	甕	地山+精査中		肩部の破片、押印あり、自然釉がかかる	常滑系
11	"	碗	黒褐色土		見込み下方にむかって落ちる段あり	唐津系
12	"	皿	地山+精査中	口径 27.4	逆「ハ」の字に大きく開く、釉調は灰黄色	唐津系
第42図1	"	碗	SK25	口径 10.0 器高 6.4	底部に露胎、釉調は暗緑褐色	唐津系
2	"	皿	"	口径 11.0 器高 3.0~4.0	縁反り形 底部露胎ちりめんじわ、釉調は淡灰褐色	"
第44図1	須恵器	蓋	SD01	つまみ径5.2	輪状つまみ	
2	"	蓋	"		口縁部小片、端部は垂下	
3	"	杯	"		底部片、回転糸切り	
4	"	壺	"	口径 10.4	口縁部小片、外面に浅い沈線	
5	"	長須壺	"		沈線状の段あり、暗緑色自然釉	
6	"	壺	"		胴部片外面平行印き、内面青濁波印き	
7	"	壺	"		外面平行印き、内面ナデ	
8	"	壺	"		中世亀山焼系、外面格子印き、内面ナデ	
9	土師質土器	杯	"	口径 14.2 器高 4.6	口縁部は外反に大きく開く、底部回転糸切り	
10	"	杯	"	底径 8.0	磨減、底部は回転糸切りか	
11	陶器	甕	"		肩部に押印あり、暗褐色	常滑系
12	"	瓶	"		釉は鉛色	唐津系
13	"	碗	"	口径 4.6	底部露胎、釉調は灰黄色	
14	"	碗又は鉢	"	口径 6.4	"	"
15	"	鉢	"	口径 9.5	胎土目積み、底部露胎、釉調は緑灰色	"
16	"	底 部	"	口径 7.8	全面施釉、釉調は淡緑色、糸切り痕あり	産地不明
17	白磁	皿	"	口径 7.7	見込みの釉を輪状にかきとる 底部は露胎、釉は黄味を帯びた灰白色	"
18	"	皿	"	口径 11.8 器高 3.0	全面施釉、帯付のみ釉をかきとる 釉調は灰白色	中国製(16C)

### 岡田茂氏採集土器観察表

挿入番号	種類	器種	出土地点	法量	形態・手法の特徴	備考
第45図1	須恵器	高台付杯	調査区東15~20m地点の 燧灰土下約1m位の所	口径13.8 器高5.3	回転糸切り、体部に「X」のヘラ記号	
2	"	壺	"		体へ底部片回転ヘラケズリ	
3	"	甕	"	口径17.4	外面平行印き、内面青濁波印き	
4	"	甕	"	口径28.0	口縁外面に凹線1条、外面平行印き 内面青濁波印き	

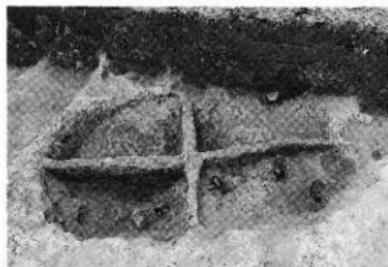
# 圖 版



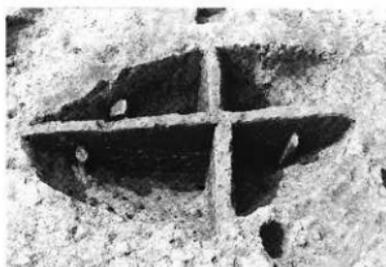
調査前遠景（南から）



調査前近景（西から）



SK-01



SK-05



SK-02



SK-02 遺物出土状況



同上 土層堆積状況



SK-04



SK-06



SK-13



SK-07 遺物出土状態



SX-01



SK-10 SK-09 SK-03  
SK-11 SK-12



同上



SK-10



SX-02



SX-03 SX-04



SX05



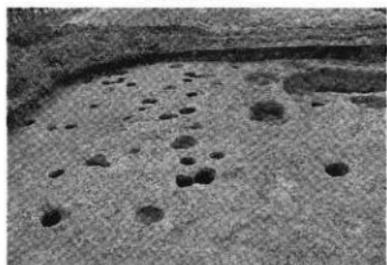
SX-06



土塚墓の配置



東調査区調査後(東から)



東調査区西端ピット群



同上(西から)



SB-01



SA-02



SB-02



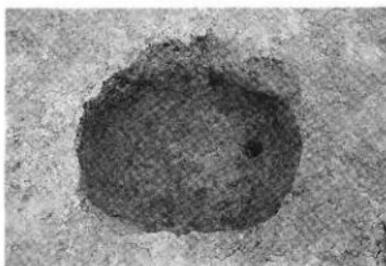
SA-03



SK-19



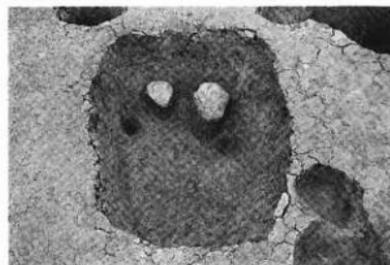
SA-01



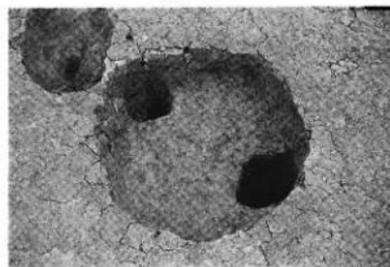
SK-20



SK-21



SK-23



SK-24



SK-25



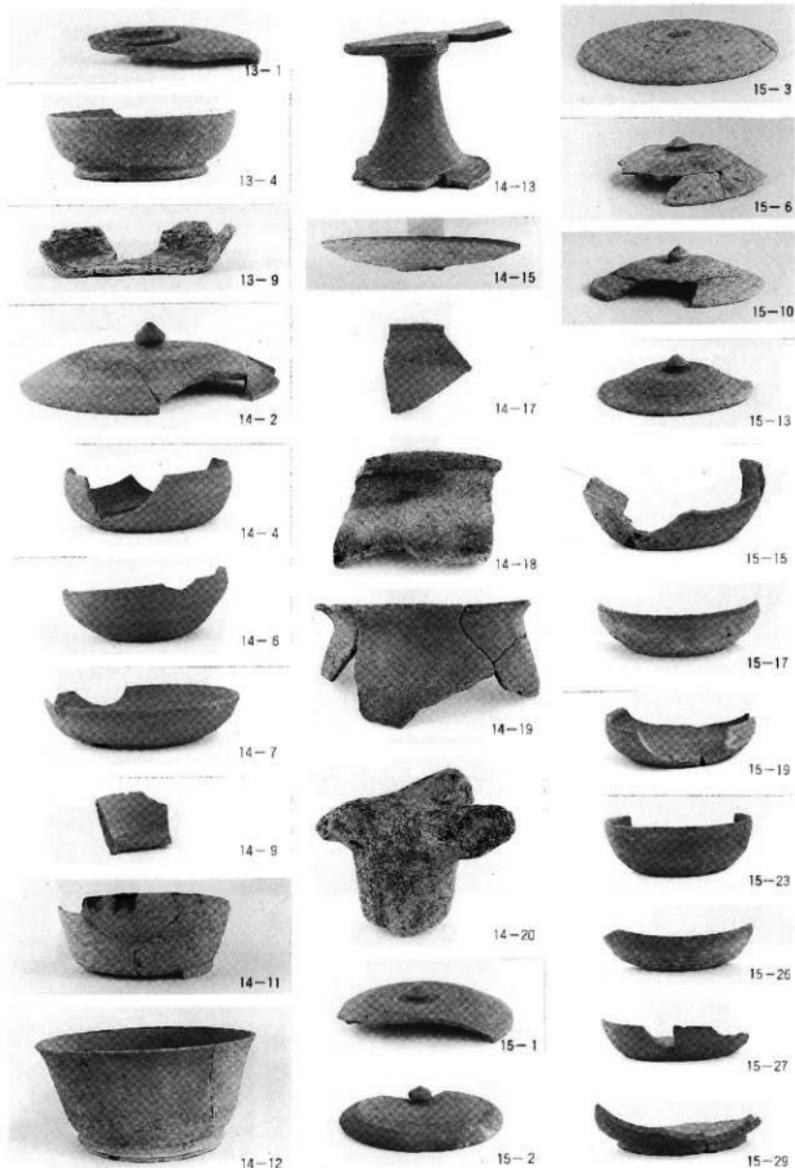
SD-01



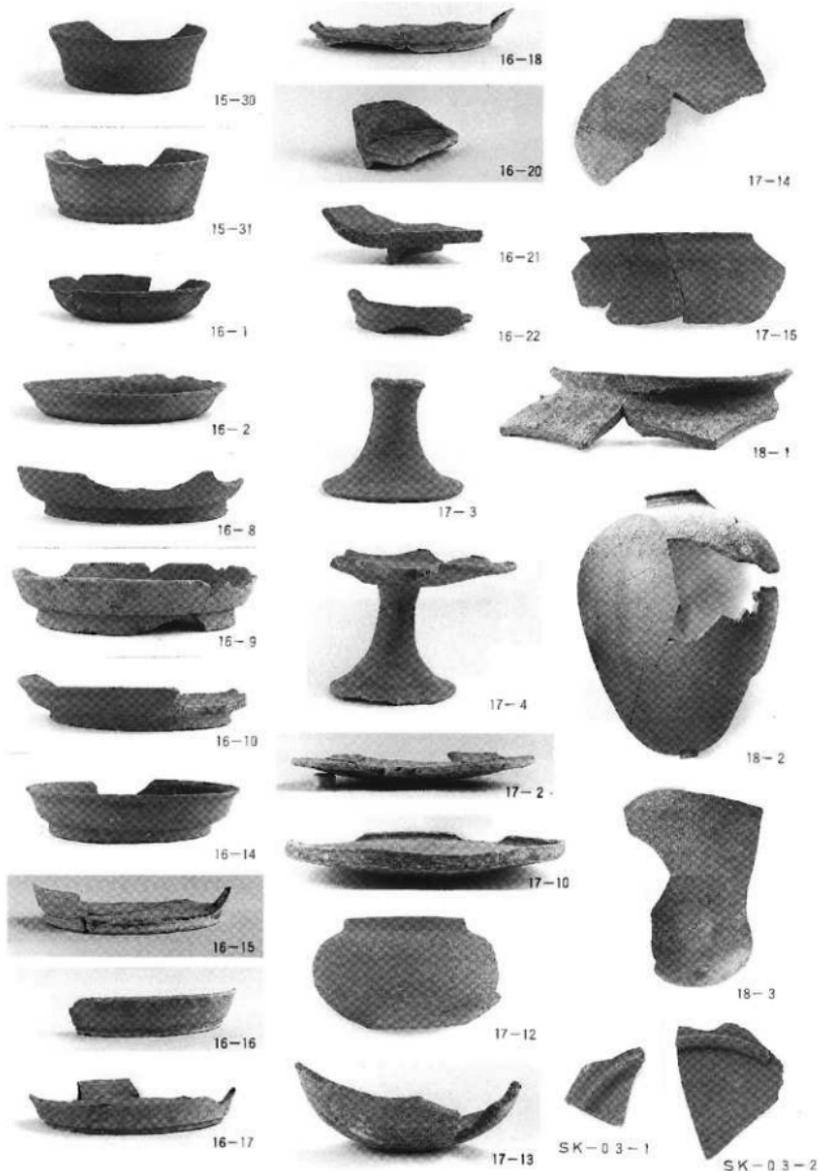
西調査区調査後 (東から)

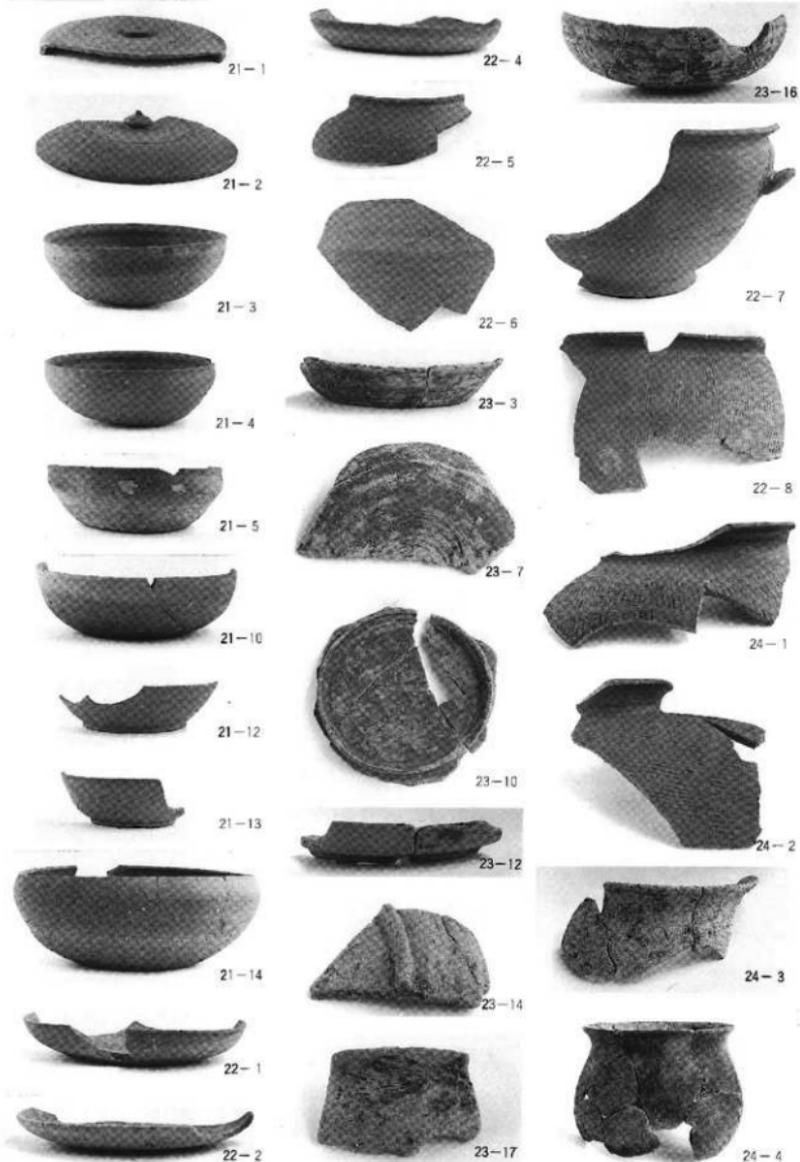


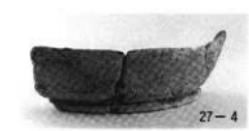
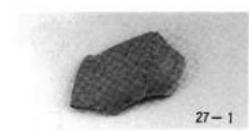
西調査区調査後 (西から)



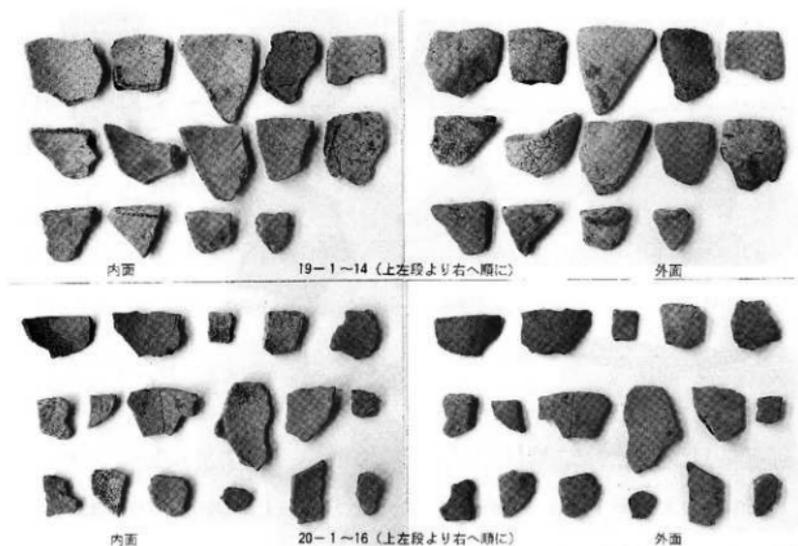
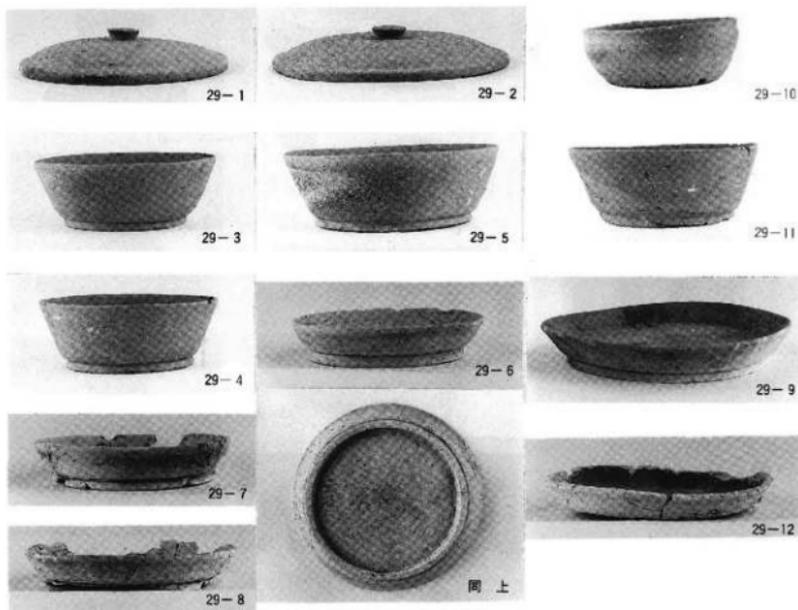
-69- SK-01 (第13図)・SK-02下層(第14図)・SK-02上層(第15図)出土遺物



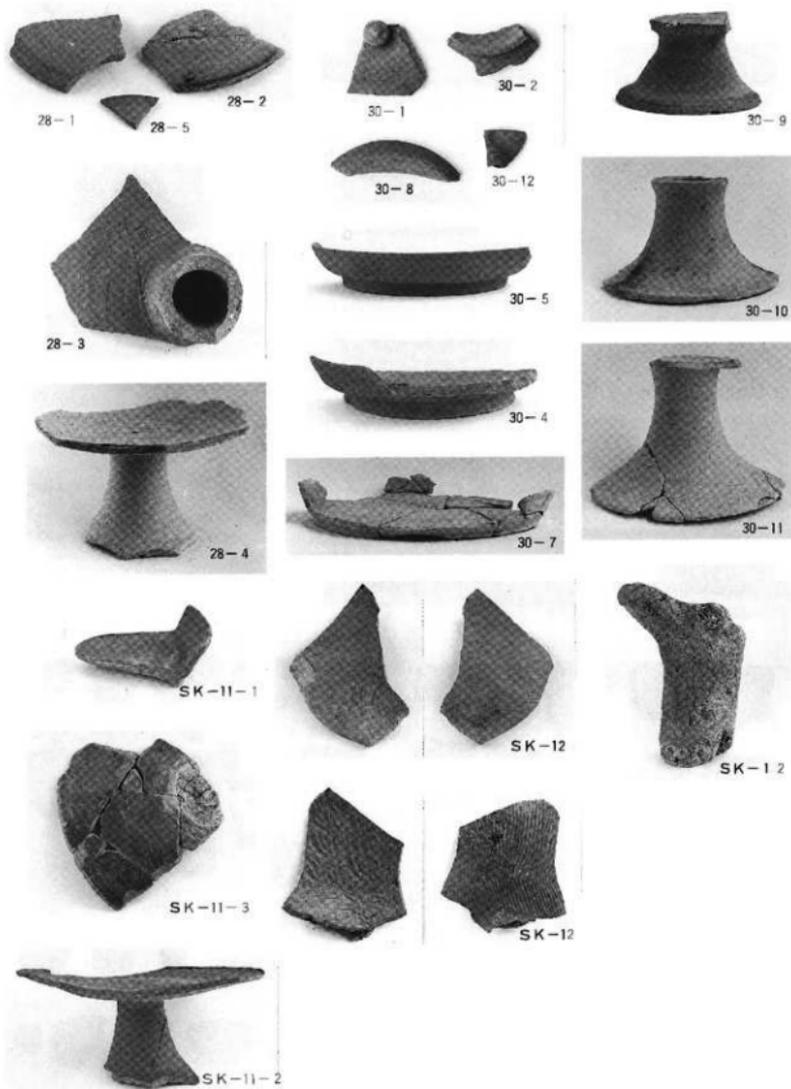




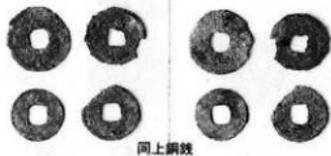
SK-04 (第24図)・SK-05 (第25図)・SK-06 (第26図)・SK-07 (第27図)  
出土遺物



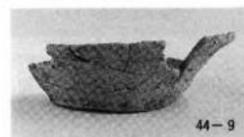
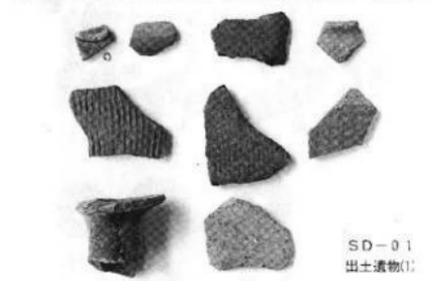
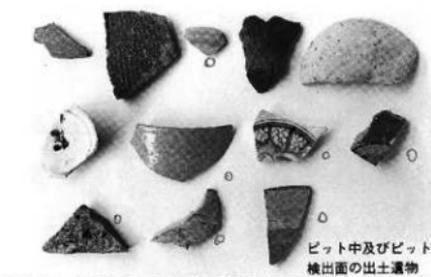
SK-10 出土遺物 (29-1~12)・製塩土器



SK-09 (28-1~5)・SK-11 (1~3)・SK-12 (30-1~11) 出土遺物



-75- SX-01 (35-1~4) · SX-02 (35-5) ·  
 SX-04 (35-6, 7) · SX-05 (35-8, 9) ·  
 SX-06 (35-10, 11) 出土遺物



## 黒田畦遺跡発掘調査報告書

1995年3月

発行 松江市教育委員会  
脚 松江市教育文化振興事業団

印刷 有限会社 高浜印刷所  
松江市北瀬町8